

---

**B I O H A Z A R D    ゾンビと誠司と時々学園生活www**

核戦争

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B I O H A Z A R D ゾンビと誠司と時々学園生活WWW

### 【Nコード】

N 8 4 1 8 S

### 【作者名】

核戦争

### 【あらすじ】

本来ならこの様な所で物語は終わらないはずであった・・・しかし彼は選択を間違えた・・・そしてその物語は終焉を迎えた・・・だが彼自身の物語はまだ終わっていない・・・  
新たな世界で生を受けた誠司・・・新たな能力を神より授かり新たな生活を始めようとしていた・・・だが誠司は神の使いにより災害が起こるということを前もって知ってしまった。そして送られてきたかつての世界の仲間、そして召喚して仲間になった新たな仲間。誠司は無事災害を乗り越え平和を満喫できるのか！！・・・

と行く所ですがただいま絶賛学園生活を満喫しています 正直バイ  
オハザードなんておきないほうがいいと思ってますB y誠司

## プロローグ前 使い魔生活の終焉1（前書き）

まずはプロローグ 使い魔生活を呼んでいると結構理解できると思  
います

つかネタが出ないからこうして過去の遺物取り出してきたけどこれ  
ってさらにネタ詰まりになるんじゃない・・・

そんなこんだで始まります

楽しんで逝ってね！！（ゆっくり風に）

## プロローグ前 使い魔生活の終焉1

プロローグ

S I D E    セイジ

状況を整理しよう　えとテンプレどおりの女王来賓　そして理不尽な任務がサイトに言い渡された　そして単独でサイトを追いかける・  
・はずだったのにシャルが着いてきた　そして奇襲している傭兵どもを叩き潰す　そして召喚されたメイドさんとサイトたちとの合流　ワルドVSサイトと俺の決闘　夜のフーケ来襲　俺とメイドさんにワルドから殿を任される　シャルを預け戦闘　徹底的に叩き潰しアルビオンへ　アルビオンについて単独行動をしていたシャルと合流しニューカッスル城へ　そして・・・

そうだ　そしてワルドが裏切ったんだと思う・・・原作でも裏切ってたから今回も裏切るだろうと予測をつけていたが・・・

式場は血で染まっていた

ウェディングドレスを着たルイズが胸を両断されて死んでいた・・・そしてそのルイズを抱えているサイトサイトが居た

サイトの左腕は肘から下が切断されていた　そして呪文を詠唱しているワルドが居る

サイトを救おうとした俺はB3グフを装備した シャルが俺の背後に隠れる そしてガトリングシールドでの牽制

「まだ居たかつ!! クソ! お前か!」

ワールドがこちらに杖を向ける すかさず俺は噴射跳躍 フイストジャンプ シャルがサイトへと走るワールドの相手をしながら脳内通信をする

(シャル)

(何? セイジ)

(サイトを連れてどこかの部屋へ・・・ついでに瞳さん回収してくれ)

(いいけどセイジは?)

(俺はあいつの相手だよ まあきにすんな ちゃんと倒すからよ)

(・・・わかった でも死なないで)

(ああ 死ぬ気なんて元からないがな)

(・・・またあとで)

シャルはコレでおk んで瞳さんに通信つと

(瞳さん)

(誠司様!! 今どちらへいらっしやいますの!!)

(それよりシャルと合流してくれ)

そして切る

そして通信をしてる間にワールドの詠唱が完了したのか魔法を発動する 発動した魔法は偏在だった ワールドが増える その数本体含め5体居た

5体全部が俺のほうを向き そして詠唱

「っっブレイド!」「っ」ライトニングクラウド!!」「ウィンド

ブレイク！！」

1対がライトニングクラウド もう一体がウィンドブレイク 3体がブレイドを発動する 1体がウィンドブレイクを地面に発射し地面を抉り破片が俺のほうへ飛んでくるその破片に紛れもう一体が俺めがけクラウドを発射した

そしてクラウドの閃光と共に2対のワルドがブレイドを構え俺に突っ込んでくる

前に出ている一体が上段から右下へ振り下ろす

俺はそれをヒートサーベルで受け止めワルドに蹴りを放つ

ワルドはそれを左へと跳び避ける それと共に背後からもう一体のワルドが現れ右中段から杖を振る 前で避けたワルドの動きに合わせブレイドで斬りかかってくる

「はっ！！当たってたまるかよ！！」

それを後方跳躍バックジャンプで避ける

斬激が空を切ったワルドめがけガトリングをばら撒く

亜音速で襲来する弾丸を避けられずワルドの体に大量の穴を開ける

そして銃撃を受けたワルドが消え去る

これで残りが4対 そしてシャルから通信が入る どうやらサイトの治療が完了して瞳さんとも合流できたらしい 今は城の食料庫で待機しているっぽい ついでにデルフを回収したようだ 迅速に離脱すると言っ切った

そして通信中に再編成したのかしらんが前衛が3人に 後衛が1人という攻撃特化の編成になっていた

三体がブレイドを発動 縦に並び接近してくる その間に後衛が詠唱している

1番目の奴が上段に構えながら接近 すれ違いざまに左から振り下ろす

足部のバーニアを噴射 右に避ける

「セイ!!!」

「クソツ!!!」

俺の回避行動と共に2対目のワールドが接近 右中段からブレイドを  
まとわせた杖で斬りかかってくる

着地する直前に斬りかかってきたから回避不可 ヒートサーベルで  
受け止める

「くらえ!!!」

「ぬうああ!!!」

体制が不十分な状態で斬激を受けたので体制が崩れる そして

「ライトニング・ブレイク!!!」

「うがああ!!!」

瞬間 体の中をナニカが通り抜けた感覚が来た 俺が今使っている  
のはB3グフ・・・MSである そしてMSは対電流対策などはし  
ていないモンである・・・案の定俺の体が動かない・・・やはり感  
電して一部のシステムがダウンしてるのか・・・もしくは麻痺して  
るようだ

「さて・・・死んでもらおうか」

そして全ての偏在が俺に杖を向ける・・・そして詠唱・・・だが完  
了しているのに放つてこない 偏在?の一人がブレイドを動させ近  
づいてくる どうやらワールドは俺を突き刺し切り刻んで殺したいよ  
うだ ということはこの偏在どもは俺が回避した場合の保険つてと  
こか

そしてワールド(多分本体)が杖を上段に構え・・・振り下ろす!!

「死ね!!!」

そして俺は死を覚悟し眼を瞑った

だがそれは俺の死ではなく全く違う結末<sup>エンド</sup>を引き寄せた

いくら麻痺してるからといってもバーニアを吹かして避ける事も可  
能だったしほかに回避できる手段なんて幾らでもあったはずだ・・・  
だが俺は人生を諦め目を閉じた・・・それがま<sup>IF</sup>ったく別の結末を迎  
える事になった

俺の体に衝撃が襲い掛かる・・・首への一撃ではなく正面から押し出すような一撃　そして背部への衝撃・・・多分倒されたんだろう・・・  
ワルドめ・・・攻撃を外したのか

そして2秒ほどしてシステムが復旧し　モニターが再表示されていく・・・そして俺は驚愕した

俺の上に覆いかぶさっているシャルが居た

俺の変わりに斬撃を受けたのはシャルだった

「え・・・おい　　嘘だろ　シャル!!」  
シャルの背中の方が右肩から腰まで避けている　その裂け目から普段は白いシャルの肌が真紅に染まっているのが見える・・・  
一目見ただけで感じた　このままだとシャルは死ぬと

「ちっ!!外したか!!　糞が!!邪魔しやがって!!偏在!!こいつらに止めをさせ!!」

ワルドが叫び周囲の偏在に命令を下す・・・

そしてナニカが俺の体の中で切れた・・・

「・・・死ぬのは貴様等だ　装備　冥王<sup>ゼオライマー</sup>」

スマンなシャル 少し耐えてくれ まず危険を排除するからな

「……なっ！！また姿が変わったと！！ まあいい 死ね」  
「ウインドブレイク」「エアニードル」「」

ワールドが風の魔法であるウインドブレイクとエアニードルを俺の機<sup>カ</sup>体へと打ち込んでくる……だが俺の周囲に展開されたバリアに防がれて俺の体に到達しない  
シャルを足元に寝かす……  
そして俺は静かに……そして言い放つ

「風か……弱い者程うるさく飛び回りたがる……！」

次元連結システム開放……よくもシャルに怪我を負わせやがったな……

塵一つ残さず消滅させてやる

せいぜい後悔しろ……あの世でな！！」

そして両腕肩まで上げ胸の光球の前で構える

そして全ての物質を原子へと還元する攻撃 次元連結システムを開放して放つ究極の一撃

メイオウ攻撃を放った

そして「ワールドとその偏在の居た場所のみが消滅した」……  
……  
……

俺はすぐ装備を解除してシャルに近づく……そして一心不乱にホ

イミを発動 何回も使用していると傷は塞がった……だが眼を覚まさない

「なんで……なんで俺なんかを庇ったんだよ……シャル……」  
タツタツと足音が式場に響く 足音を響かせながら近づいてきたのは瞳さんだった

「誠司様！ ここはもう反王統軍レコンキスタが来ますわってシャルロット様！  
！一体何があつたんですか！！」

「ああ瞳さんか……悪いがサイトを連れて……ってもう連れてきてるか……サイト 大丈夫か」

「……あつつ ははは 大丈夫なわけねえだろ 左腕が切り取られたんだぜ もう傷は塞がってるけどまだショックはあるわな……」

「そつか……なら・サイト 頼みがある」  
サイトに頼む 遺言を

「……なんだ」

「簡単だ……シャルにただ一言伝えてくれればいい」

好きだったと

我が生涯で一番愛していた……と

「……なんでそんな事を言うんだよ 自分で伝えるよ……って  
お前まさか！！」

すまん

生き残ってくれよ

そう願いながら俺はサイトのみぞおちに拳撃を打ち込む

「っ！！ な・・・んで・・・だよ・・・セイ・・・ジ」

「・・・・・・・・」

すまんな お前は生き残れ この世界で生きるのは大変だが頑張ってくれよ

「誠司様 失礼ですがそろそろ脱出されないと・・・もうここは危険です」

「スマンな瞳さん・・・俺は逃げるために時間を稼ぐ」

「何故ですか！！誠司様が残る必要はありません！！私が残れば！！」

「無理なんだよ ほれ こいつを見てくれ」

そう言いメニューの能力を指差す そこには

『召喚 脱出用』

『効果 自身が戦闘行為を行っている間 召喚が可能になる ただし戦艦クラスの防御力を持つ機体のみ 戦闘を行えない状態（例 戦闘の終了 自身の離脱 自身の死亡） 仲間は指定した場所まで送り届けてくれる なお機体が稼動状態にある間は自身の所有する能力が使用不可となる 強化系の能力を除く』

「こ・・・れは！！」

「まあ俺は死ぬだろうな でも一時間ほど戦闘してりゃいいわけだし・・・運が良きゃ生き残るだろ・・・まあ相手は3万だがな・・・

えと 購入 使用 召喚・・・そうだな・・・出る！！ 凄乃皇！！」

そしてそこには異世界で開発された機体がそこに鎮座していた・・・と思ったら外に出ていた・・・まあこんな所で召喚したら建物崩れ

るしね

「コイツなら絶対にシャルたちを守ってくれるはずだ・・・さて」  
コクピットをベイルアウトする　コクピットの中に入りシャルとサ  
イトをシートに座らせハーネスで固定する

「瞳さん！！早く乗ってくれ！！時間がない！！」

「嫌ですわ！！ここでこの機体に乗ったら私はもう二度と誠司様に  
会えないとしか思えません！！私も誠司様と共に戦います！！お願  
いします！！私も誠司様と一緒に戦わせてください」

「・・・多分死ぬぞ　それでもやるのか」

「それでもですわ！！私は誠司様のいない世界になんか興味はあり  
ません！！せめて死ぬのなら共に！！」

「・・・戦闘準備をしる　得物をいつでも使えるようにしておけ」

「！！！！　有難うございます！！」

そしてコクピットに寝かされているシャルに近づくと

「・・・シャル　今までありがとな　好きだったよ」

そう言いシャルとサイトに巻貝のような何かを握らす　シャルには  
別に短剣・・・ルールブレイカーを握らす

最後に額にこっそりキスをしてコクピットを閉じる

そのまま待機させておく　戦闘開始したら発進するように設定した

「さてと　残りのポイントで・・・を買って・・・後はコイツを取  
り出して・・・装着と」

そして俺は決戦に備え装備を確認する

今現在の装備が

ダネルMGLグレネードランチャー（以降グレネード）　残弾薬合

計で15発 6発層填済み

ヒートサーベル B3グフカスタムモデル (以降ヒートサーベル)

白熱化は使用不可 質量で叩き潰す兵器に成り果てた 左腰に日本刀のように挿してある

拳銃 (層填数と後遺症を無視してM500を一丁 家殺し 弾薬を30発ほど)

SPAS12 白兵戦闘時でも使用可能なようにストックを取った 12ゲージショットシエルの残弾が50ほど スラッグ弾が30発ほど 装備時は右背部(BIO5みたいな感じで)

ガトリングガン 制圧射撃用に城門下に置いてある 接近してきた奴らが200を越えた時点で使用する 色々改造した 弾種は5.56mm NATO弾を使用する 固定式 瞳さんに使用させる(彼女はチエーンソー好きで飛び道具を好まない だから無理やりやらせる事にしたwww)

・・・ 全武器を使い果たした時のために購入 全武器を使い切った時に空から降ってくる用に設定・・・そっちのほうがなんかいいじゃんwww

サングラス もちろん装備 俺KAKKOKIwww

黒いコート (対弾対刃対爆耐火性能を持つコート BIO3の追跡者のをイメージするといいいい)

その他服 説明省きます・・・

・・・遠くで怒声や悲鳴が聞こえる・・・そろそろ来るか  
この城と町への道は一本道で作られている・・・だからこの城の城  
門前で俺達は砲撃体制に入っていた

瞳さんには俺の横で待機してもらっている・・・そういや説明して  
なかったな 召喚されたメイドさんの名前なんだ フルネームで粕がす  
谷瞳やひとみさんだ・・・某チエーンソーメイドさんだよ・・・まあ詳しい  
経緯は本編を読んでくれ このお話はあくまでもIFだからな

「誠司様！！敵影を1KM先に確認 視認できる数でも500は下  
りません」

瞳さんが淡々と告げる・・・まあ500程度ならまだ何とか・・・  
さて

「んじゃ砲撃開始と行きますか さて瞳さん」

「なんですか誠司様？」

「得物は動作するか？」

「ぬかりはありませんわ ちゃんと動作いたしますよ」

「しかし何故残ったんだ？残るのは俺だけで十分だったぞ」

「・・・私は誠司様に救われました・・・前の主人に裏切られて絶  
望しか残っていませんでした私に希望をくださいました・・・今度は私  
が誠司様を救いたいのです！！」

「・・・そうか 死ぬなよ 瞳」

「誠司様・・・分かりました この瞳 必ずや誠司様と生きて帰る  
ことを誓いますわ」

「ああ・・・さて 今がどん位だい」

「ええと・・・距離が大体500Mくらいですわ・・・」  
んじゃ発射用意つと

グレネードランチャーをセットする 照準機無しで攻撃するので着  
弾地点が曖昧になってしまいがそんな事はどうでもいい 要は敵を  
殲滅できればいいんだから

「用意……発射！」  
そして虐殺が始まった

ポシュッと音を立ててグレネード弾が飛んでいく……そして前方で爆発……どうやら密集しているところに落ちたようだ……そしてもう5発連続で発射……縦に着弾地点がずれていく……敵集団が動揺したのか知らんが立ち止まる バカめ!!

「瞳！ 制圧射撃開始!!！」

「わかりました!!！」

合図と共に瞳さんがガトリングを放つ

ギャロロロロロロロロロロロロロロ!!!!

そして響く轟音……ヤバイ コレはやバイ けっこうひどい光景だわ

「一時停止!! 200Mを切った時点で再射撃開始!!！」

「わかりました!!！」

そして敵が接近してくる……250……220……200

「発射開始!!！」

またも合図と共にガトリングが火を吹く……それに合わせてこちらも射撃

……コレでもう被害500ほど与えたんじゃない？？  
そんなことを考えながら射撃する……そしてガトリングの回転がとまる……弾切れだろうな……んじゃ

「瞳さん!! やるぞ!! 戦闘だ!!！」

「分かりました!! 誠司様!!！」

そしてスサノオが学院に向け飛んでいく

「さて・・・うまくいけよ・・・」

そう願いながら空を飛び段々と小さくなっていく凄乃皇4型の姿を見送った

さて・・・1時間頑張らなきゃ・・・

「有難うなシャル・・・今までの生活・・・いろいろ会ったけど楽しかったぜ」

そして生死をかけた1時間が始まった

プロローグ前 使い魔生活の終焉1（後書き）

あはははは 色々と崩壊するなあこれ（回転する椅子に載りながら  
激しく回転中）

セ「なあ・・・このあとどうなるんだ」

居たのか・・・まあ色々と崩壊するだろうな（TH2の世界観とかが）

セ「壊しちゃ駄目だろWWW」

まあ次どうなるかだな・・・まあ早めに上げるよ

セ「ちょ 待て!!」

んじゃまた

## プロローグ前 使い魔生活の終焉2

今の俺と瞳の状態を表すなら正に満身創痍という言葉がふさわしいだろう

そのような言葉が似合うほどに俺と瞳の怪我は酷かった

瞳は全身が切り傷だらけだが傷自体はあまり深くはない・・・だがその身にまとっているメイド服はかつての面影を残してはいなかった エプロンは切り裂かれてぶら下がりカチューシャは戦闘中にどこかに行ってしまったのか知らないが頭の上には乗っていない そして三つ編にしてあった髪はリボンを切り裂かれストレートヘアになってしまっている・・・こんな状況下だがきれいだと思ったのは内緒だ

だが俺の姿はそれ以上に酷い 黒かったコートはズタズタでもう見る影もない そして履いていた靴はもう鉄板が見えるほど擦り切れていた そして武装はもうM500と層填済みの残弾が3発 SPAS12がスラッグ弾フル装填で残っている もう銃火器しか残っていない ヒートサーベルは初戦で鏝迫り合いになったところで折れた

このままじゃ持たない・・・か

正直凄乃皇から情報が送られてくるのだが後15分は最低必要であるとのこと・・・正直もたない

「うおおおおお」

兵士が右手に持っている剣を袈裟懸けに切りかかってくる・・・俺

はそれを後方に飛びのき避ける それと同時にM500で射撃する  
ガウンガウンガウンと威勢のいい高音が三回響く そして兵士の右  
胸と左の太もも それと眉間に銃弾がすいこまれる そしてその兵  
士の命を奪っていった

「ちっ！！くそ！！」

残弾が切れたM500を捨て 背部からSPAS12を取り出し右  
腕で構える・・・そしてセレクターをセミオートに設定 瞳に迫る  
敵兵2人の胴体めがけスラッグ弾をお見舞いする

お互いのカバーをし合っているがもう限界だ

「瞳！！撤退しろ！！ このままじゃ持たない」

「いやですわ！！私は誠司様と一緒に」

頑なに否定して逃げようとしなない・・・なら

「主人として命令する！！ 生きろ！！」

「なっ！！」

瞳が絶句する・・・

「お前の使命はなんだ！！」

「誠司様とシャルロット様をお守りする事ですわ！！」

「ならその使命を改変する！！ お前はシャルのみを守り続けな  
おかつ生きる！！」

「嫌ですわ！！ 私はもうご主人様を失いたくありません！！」

「大丈夫だ 俺も離脱する 先に離脱して安全を確保しておいてく  
れ！！」

「・・・分かりました・・・でも約束してください・・・必ず生き  
て合流すると！！」

「・・・ああ わかった 努力する」

「努力では駄目です！！ 絶対です！！」

「分かったから早く行け！！そこから包囲をかくぐって逃げられ  
る 今のうちだ！！」

そついい横の通路を指差す 瞳はその方向に走り去っていく

「信号弾を上げる！！ 赤なら合流不可！！青なら合流可だ！！」

・・・聞いていたかどうかはしらんがとりあえず伝えておく・・・  
当然瞳を追って兵士が5人追おうとする が

「追わせたたまるかよ！！」  
殺気を込めながら追おうとする兵士たちにスラッグ弾を連射 そし  
てSPAS12の残弾が尽きた

その時 空から舞い降りてきたものがあつた

それは兵器だつた

そいつは広場に舞い降りた・・・いや舞い落ちた・・・そして砂煙を上げる

砂煙が晴れて視界が確保されるとそこにはかつて月面戦争で活躍した機体の姿があつた

Gと呼ばれている機体が広場に右膝を付き左足を上げた状態で待機していた・・・その姿は正に姫に忠誠を誓う騎士のような姿だつた

俺の姿はそこにはない もうすでに装備していた そう

ゲッター1を

今回の装備と違う点がいくつかある

それは機体の機能制限 活動時間の減少 そして使用してから5分後に使用者もろとも周囲1KMを吹き飛ばすという厄介な効果・・・  
この場合はゲッター炉心の融解<sup>メルトダウン</sup>つてところか

つかなんでこんなもんがあるんだろつなホント

そんな事を考えながら起動させる

・・・さて 蹂躪の開始だ!!

目の前で怯えている兵士をゲッタートマホークで横になぎ払う

グシャ!!

斬撃したはずなのに何故か潰れる音しかない

そんな事を考えつつ30Mほど前に居るトロール鬼にゲッターマシンガンで射撃

案の定トロール鬼は反応すら出来ずに死んでいく だがそんな事はどうでもいい 今必要なのは敵司令部に乗り込むことだ もう2分もない すでに俺の周辺の空気が歪み陽炎を発し始めている

敵が集まっている所に指令が居るだろうと浅はかな考えで突き進む俺 だが指令は居なかった

ある程度敵兵を殲滅してから俺は思い出した この戦闘では敵指令は出てこないという事を

司令部に向かおうとしてももう時間がない

そんな事を考えていると脳内通信が入る・・・それに出る前に信号段を打ち上げる・・・赤い信号弾を

そして通話する俺

(セイジ!?)

(シャルか・・・)

(無事?!今は何処に居る!?)

・・・つくろつても意味ないな 真実だけを話すか

(今は敵のど真ん中だ 合流は無理そうだな)

(そんな!!如何にかして戻ってこれないの!!)

(・・・無理だな そもそも戻ったところで死ぬだけだ)

(っ!!) また・・・皆私を残して消えていく・・・なんで・・・あなたは私のことをそばで守るといつてくれた!!それなのに)

(うるせえ!! 少し黙ってやがれ!!)

(・・・え)

・・・罪悪感が俺を襲う・・・だがそれも意味はないだろう 俺の体はもう消えるのだから

(シャル・・・いやマスター さよならだ)

(なんで!! 貴方まで私を置いて行く気なの!!)

半狂乱になって叫ぶシャル

(・・・あやまりはせんよ これが俺のした行動の結果だ・・・)

(何でなの・・・私が好きな人は皆・・・消えて逝ってしまうの・・・)

・)

多分向こうでは泣いているんだろう 俺も泣いている

(なあシャル)

(何 セイジ)

脳内通信だが涙声で聞こえてくる・・・

(俺は・・・)

そして全てを言い終える前に俺の体は周囲1KMを含めて吹き飛んだ

ブローグ後 死後の世界?? (前書き)

後悔

## ブローグ後 死後の世界??

・・・黒いな・・・うん自分の肉体すら見えない だって黒いんだもの

んなこといつてる場合じゃないな この場合は多分また異世界に飛ばされるんだろうな

ピカッ!!

ほら後光が差してきたって・・・ココ何処よ・・・

俺は目を開けると見慣れない部屋に居た その部屋にあるのは喫茶店で見かけるような二人用のテーブルとこれもよく見かけるイスが対極に一つずつ置いてあった 壁全体はコンクリートで覆われていただけだった 塗装も何もしていないからコンクリートがモロに出ている・・・俺はやる事も無いからそのいすに座る

10分後

「うば~~~~」(訳 やる事ない ひまだあ~)

30分後

「うるぶあ~~~~」(訳 いつまでまたせんじゃごるあ!!~)

「一体何の唸りですか？ そんな唸り声を上げていると幸せが逃げちゃいますよ〜」

なんかどこかで聞いたことのあるようなのんきな声が聞こえた・・・顔を上げてみるとそこにはゴスロリファッションをしている綺堂渚さんが居たって

「誰ですか??」

女性には優しくしなきゃね

「私は 綺堂渚という者です 今回の誠司君の説明役として派遣されました〜よろしくね〜」

・・・のほほんとしてる・・・やっぱり癒されるな渚さん

「ええとね 誠司君は死んじゃったって事知ってる・・・よね?」

「疑問系ですか・・・まあ知ってますよ」

「なら〜この後どうなるか大まかには知ってるかな〜」

「もちろんです サー」

「あはは ならよろしい 説明する手間が省けておねえさんうれしいよ〜」

「・・・そうですか・・・で何故抱きついてくるんですか!??」

「あれ〜年頃の男の子はこういうこと嫌いかな〜むしろ好きよね！」

「なんか断言された！まあいいんですけど・・・とりあえず自重してください それとなんでまた召喚される事になってるんですか？」

・・・また召喚されるとか・・・マジだるいんですが

「ほえ〜どういうこと〜」

・・・状況を理解しているのかこの人は・・・

「誠司君は召喚なんてされないよ〜むしろ誠司君が召喚できるかも知れないよ〜」

「どういうことですか??？」

「誠司君・・・次行く世界は平穏な世界らしいよ〜」

「マジで?？」

「マジマジ〜よかったね〜もう危険に脅かされる事はないよ〜」

そうか・・・平和な世界か・・・

「あと〜無事に生活するために一部の記憶を取らせてもらったよ〜」

・・・ちょー!!のほほんとした笑顔で言う台詞じゃないよそれ!!

「大丈夫だよ〜時期が着たら神様が返してくれるって言ったから」  
しかも神様ですか！！あのクソ爺ですか！！

「能力については〜あとで説明するからね〜」

能力が要るような平和な世界ってどんなんだー！！！！

「また会おうね〜ばいばい〜」

ちよ　ま

言い終わる前に俺の意識が落ちた



## プロローグ終了 その後の説明会

ども 誠司です 転生しましてはや17年 半年ほど前からアメリカに居ます そして今帰宅するところDA あと少して祖国（日本です）の大地（コンクリートですね分かります）を踏めるしあの空（夢と希望とガスがたっぷり詰まった空気ですねwww）を吸える！！

・・・オイ作者 俺の感動を台無しにすんじゃないよまったく

さて そんな俺は今飛行機内に居る・・・はずだった でも今はいつも通りの黒い世界に居る

・・・全くなんだってんだ

そんな事を考えているとまたもや後光が差す そして前回と同じ空間に呼び出された

内装は全く変化がなかった・・・俺の記憶に変化がなければね

まあ前回と違う点を上げるなら先に渚さんが椅子に座って待っていたぐらいかな

「やっときた〜おそいぞ〜」

待ちくたびれて疲れているのか渚さんが発した声は無気力な声だった

「遅いといわれても・・・でなんで俺はここにいるんですか？」

「何でって言われても・・・そのうちイベントが発生するから教えて上げようと思って」

・・・イベント？ 何が起るってんだ？？

「ええとね イベントってのはね 内容は言えないんだけど絶対に武器が必要になってくるんだよ」

武器が必要って・・・どんなイベントだ？？

「内容は言えないんだけどね ほしい武器の名前をこの紙に書いてくれば速達便で送り届けてあげれるんだ」だからこの紙を渡しておくね」

そう言い渚さんは何処からか知らないが紙を取り出し・・・何処に入れてあるんだ・・・？？おれに差し出してきた 俺はそれを受け取り書き始めた 正直この後何が起るのかわからない だから何にでも対応できるように各種の銃火器とナイフを取り揃えておくことにした

「えと読み上げるね まず銃火器がとVP70とストックがセットでマガジン（空）が5個で9mm弾が36発  
とSPAS12と12ゲージ弾が40発 あとグルカナイフ これ  
が初期装備になるけどいいかな？」

いいですよ でも日本でこんなもん持つてたら間違いなくタイーホ  
されますけど

「そこはだいじょぶ 始まってから違和感無い様に誠司君の元にいくようにしておくから」

ならいいんですが・・・

「で 説明に入りますよ」

・・・一体どうなるってんだ

かくかくしかじか

説明された結果

1 俺の能力は視覚強化 あと筋力強化だった

2 サポートキャラという存在があり 一人につき何人がサポートキャラを召喚できる これは個人差があるらしい

俺は何人召喚出来るか聞いてみたが渚さんは笑顔で「禁則事項なのだ」  
「と言いついて教えてくれなかった サポートキャラは選択不可で知っている作品からランダムに選択される・なおキャラ自体がこちらの呼び掛けに答え召喚される事が稀にあるらしい

召喚された人は何らかの能力を得ている サポートキャラは常時現界しているサーヴァントを想像すればいい

サポートキャラが死亡した場合 再召喚は不可である

召喚された人？は基本的独自の判断で行動する だが一応こちらの命令は受け付ける 行動するかどうかは別だが

3 俺はこの後元の世界へ帰される そしてそのうちバイオハザードが発生することが分かった 俺はその事件の中での役割は何らかの行動をし その町にあるであろう某巨大企業の研究所を潰す事・・・ それとTを撃破することが必要らしい

今後の活動のために資料は持って帰っていいらしい

絶対条件として自己の生存 T002 T003の撃破がある 条件を満たさないで脱出した場合死亡するらしい

4 おまけとして俺の知らない敵対生物に対しての基本的な情報を貰った・・・俺はこんなのと戦うのか(泣)

5 俺はこの後17歳の4月6日に飛ばされる 記憶を引き継いでいけるらしい

#### 考察

バイオハザードが発生する・・・神はそんなことを言っていなかったのに バイオハザードの発生は修学旅行の日らしい つか説明できないって言ってたのに何で説明できてるのかなあ？

「コレでいいかな？ んじゃばいばい」

え ちょー！！ まってくー！！

またも言い終わる前に飛ばされた・・・俺って一体・・・

消えていく意識の中でそんな事を考えてた（泣）

01 記念すべき自己紹介 そして始まる学園生活（前書き）

この作品はトウハート2とバイオハザード あと一部ゼロ魔のキャラと作者の妄想で出来てます

そのことを理解したうえで、ご鑑賞ください

## 01 記念すべき自己紹介 そして始まる学園生活

えと・・・誠司です

なんか色々在りましたがとりあえずそこんところは置いて・・・

この世界って結構理不尽だなって思いました

だってあの空間から抜け出したと思ったたら飛行機の機内じゃなくて何処か知らないけど学校の教室に居るんだよ！！・・・いや 多分どこかは分かると思うんだけどなんか思い出せない 何かが引つかかってるんだよな・・・

んで隣にパニくっているサイト あと多少動揺してるシャルがいた・・・って何でココにいの！！君たちなんでここに！！つか最後に着てた服と違うだろ！！何で学生服 まあピンクっぽい学生服着てるシャル可愛いけど・・・ってそうじゃない 俺が今求めているのは現状把握！！ そう現状把握なんだって！！・・・あ” -  
- - パニくってないで状況を冷静に・・・そう 冷静に

「判断できるかー！！！！」「わひゃう！！」「なんだ！！」  
・・・どうやら俺が急に大きい声を出して隣の教卓で皆を静まらせようとして

・・・すいません 小牧さん似の人  
「きゅ 急に声を出さないでください！！ いや むしろ驚いて”めんなさい”」

・・・悪いの俺なのに何で謝るかなあ・・・  
「いや・・・こちらこそ驚かしてすいませんでした・・・ちょっと考え事をしていました」

「はあ 考え事ですか・・・考えるのはいいんですけど今は自己紹介してください じゃないと何も進まないですよ」

「そうだー 早く自己紹介ぐらいしやがれー」

「そうそう つかなに考えてんだよ誠司」

小牧さんに敬語でなおかつ簡単に現状を教えてもらった。そして急ぎ立てる高坂・・・雄二だったっけ？ 思いだせん・・・まあ高坂似の人（以降高坂と呼称）でおkという事で

小牧さん似の人（以降小牧と呼称）に説明されて思い出したように俺はクラスメイトとなる皆に自己紹介をする

「あ”・・・ども 今回この学園に転校してきました木原誠司と申します えと・・・???”

俺は生前も以前の転生でもろくに自己紹介なんてしなかった。だから早速躓いたよ・・・

「おーい それだけか つか早く終わらせてその可愛い子の説明に入らせるー！」高坂

「いや 何を話せばいいか分からないんだが・・・」俺

「ん？ 自己紹介なんて自分のことを話すだけじゃんか いったいどうしたんだ??」才斗

「・・・そんなことを言うならあなたがやってみたらどう？」シャル

「わかった 俺は平賀才斗っていいいます 色々迷惑をかけるかもしれないけどとりあえずよろしくなー！」才斗

「・・・サイトでも出来る事が何で俺には出来ないんだ・・・（自己嫌悪）」俺

「そんな事ない 貴方はやれば出来る 貴方は私にそれを教えてくれた」シャル

「そうか・・・ありがとなシャル」そういいながらシャルの頭に手を置きなおかつ撫でる俺

「／／／／／／／／」そして赤くなるシャル

「・・・いい加減に自己紹介には入れやー！」「・・・クラスメイト？？からの全力の突っ込み

・・・もう少し位現実逃避させてよ・・・

なお その後はシャルの自己紹介があつたが結構途中でつかえて

てその姿で萌えた俺が居た事は内緒だ

無事??に自己紹介を終えた俺とシャル あと才斗は小牧氏の一言  
「あの〜 もうすぐ授業始まつちゃうんでこの話はまた後でつて  
ことにしませんか〜」

この一言で全員が授業準備に入った・・・小牧さんすげえ!!  
そして俺は俺の席・・・と言えるのか??

「なんでミカン箱と座布団・・・」  
俺の席つばいところにあつたのはミカンと書かれた段ボール箱と座  
布団・・・ついでにサイトも同じ様な席だ・・・新手的虐めですか  
そんな事を思いつつもその席?で授業準備をする俺 サイトはすで  
に授業準備は終わらせてある・・・無論ミカン箱でだ シャルはち  
やっかり普通の椅子に座つてた

そして先生が入ってくる・・・この先生の名も知らない俺だが何故  
かこの先生は国語教師だと思つた

「さて 数学担当となつた小野ヶ浩おのがこう二郎といいます では皆さん一  
年間頑張つて授業を受けてくださいね 私は二年の数学担当ですの  
で2回私の担当になるような事が無い様頑張ってください」

あらら 数学ですか 外れたな・・・まあいいですけど

「では授業を始めたいのですが・・・そのまえに えと そのミ  
カン箱の生徒 名前はなんですか」

「木原誠司です」「平賀才斗つて言います」

「そうですか では木原君に平賀君 そのミカン箱はなんですか?」

「机です」

.....

先生が口をぽかんと開けて呆けている・・・俺おかしいこと言ったかな？

「・・・私の記憶が間違っていないければこの学園の生徒は全員机で授業を受ける事となっているはずですが・・・さて 正直に出なさい 誰ですか 机と椅子をミカン箱と座布団に変えた人は 正直に申し出たならば罰は軽いですよ・・・」

先生が笑顔で 眼が笑ってない笑顔で皆に問いかける

そして沈黙 10秒ほどして俺が沈黙を破る

「先生!!」

「はい なんですか？ あなたが実行犯ですか？」

「いえ 違います!! 罰の内容についてです!! 罰の内容は何でしょうか!!」

「ふむ・・・そうですね ではトイレ掃除で」

結構軽いな あの笑顔だともっと重そうだと思ったんだが

「トイレの便器を素手に洗剤つけてゴシゴシと洗う掃除を1ヶ月ほど」

「……………重すぎるわ!!!!!!」「……………クラスメイト一同

わお 凄いなこのクラスの団結力 つか重いな!! 酷過ぎるよその罰

「なんだってー!!私の悪戯がバレたらトイレ掃除だとおっ!!」

ふざけんじゃないやい!!」

「・・・なんかちっこいのが乱入してきた・・・多分まーりゃん先輩だろうな　あまり記憶無いけどとんでもない人だったって事は知ってる

そんなノリがあと3時間続いたのであった・・・

そして場面は変わり昼休み

「ねえ木原君」

考え事に耽っていた最中で小牧さんに呼ばれる

考え事というのは何故ここにシャルとサイトが居るのかについてだその事についてさつきからずっと考えている　まあ結論は大体出るんだけどね

多分渚さんの言っていた召喚能力だと思う　相手が望み召喚される事もあるみたいな感じのことを言っていた・・・ということは俺は生存するためのカードをもう既に2枚失っているという事である・・・  
・まあシャルとサイトが居るんなら何とかかなると思うんだが・・・  
つかシャル現代知識とかあるのか??

「・・・司!!!誠司!!!!」

ドズツ!!

「魚っ!!!　なんだ!!!」

頭部に衝撃が起きた・・・何があった!　襲撃か!!!それとも既に災害が発生でもしたか!!!

「・・・冷静になって周りを見渡す・・・困惑してる河野と痛そうに手を振ってるシャル　あと呆然としているサイト

「誠司!!!　やっと気づいたか」

・・・災害も襲撃も何も起こってなかったか・・・  
俺は声をかけてきたサイトの方に顔を向ける

「・・・サイトか なんだ？」

「いや 河野が購買と食堂に案内してくれるってよ で誠司反応しなくて河野が困ってたからシャルが叩いた」

そっか シャルに叩かれたのか・・・ぐすん

「ごめんなさい でも話し掛けても気が付かない貴方も悪い」

「いや こちらこそすまない 少し考え事をしてたもんでね」

そして話しながらバツクをあさる俺 やっぱり弁当は入ってなかった そりゃ入れてないからな

「そうか で今の時間だともう購買のパンしか余ってないと思うけど行くかい？」

「・・・パンが有るだけでもましたな」「無いよりは有る方がまし」「すまん」

「んじゃ行こう 雄二・・・は居ないか」  
きよるきよると河野が周りを見渡す・・・どうやら高坂を探してるっぽい・・・

「んじゃ着いて来て 購買に案内するよ」  
そう言い教室を出る河野 そしてサイト シャル 俺の順で教室を出る

そして歩く事数分

「こりやまた凄いな」

「いつもはこんなに凄くはないんだけど・・・なんで??」

「凄い人混み・・・」

「懐かしいな・・・この空気この風 これぞ購買よ」

・・・名台詞改築して言ってる場合じゃないな このままだと何もとれずコッペパンだけになってしまっ!!・・・

「・・・皆」

「なんだい木原君」

「どうした誠司？」

「どうしたの？」

皆が俺のほうに向く・・・覚悟は決まった 後は突貫するのみ

「後を任せたぞ シャルは待つてくれ！ 残りで突貫する！！」

「分かったぜ 行くぞ誠司！！」

「オウよ！！行くぞ相棒」

「ちょ 木原君に平賀君！！・・・ええい！！僕も行くよ」

俺とサイトが敵陣（パンに群がる生徒共）に突っ込む 少し遅れて  
河野も付いて来る

「どけどけー！！」「うるああああ！！！！」

俺が生徒を掻き分け道を作る そして出来た溝にサイトが腕やら足  
やら突っ込み穴を開け入る 数回繰り返すとサイトが倒れた・・・  
何かに躓いたのだろう・・・お前の事は忘れないぜ！！

「うわああああ ぐえ！！おふうっ！！ちょ！！ 痛っ！！ 踏  
むな！！」

サイトの断末魔？が聞こえる 君の死は無駄にしない！

そしてカウンターにたどり着いた！！残っているパンは少ない！！  
俺は残っているパンをありったけ確保した・・・とは言っても8個  
ほどだが

そしてカウンターに居るおばちゃんに札を出す

「パンの群れ！！獲ったどー！！！！」

俺の声が購買に響き渡る・・・かと思つたが周りが五月蠅いので叫  
んだ意味がなかった まあ気付いてくれない方がいいんだけどね  
そしてまた人混みを掻き分け戻る 途中でボロボロになったサイトを  
掴んで

そして人混みを抜けて待つていたシャルにパンを渡す

「パン買って来たぜ はい好きなの取ってってくれ・・・あれ河野  
が居ない・・・」

周りを見渡す・・・河野が居ない・・・と思っていたら戻ってきた  
どうやら俺の後ろに付いて戻ってきたらしい だから気が付かなか  
ったのか

「・・・木原君 君って凄いな あの亡者たちの視線を全く気にし  
ないなんて」

ん？亡者共？？？・・・まさか

俺はゆっくりと振り返る・・・振り返って俺の視界が捕らえたのは  
こちらを恨み妬む視線と驚きの視線しかなかった・・・

「とりあえず戻ろう ここだとゆっくりパンが喰えない」

「・・・そうだね んじゃ屋上にも行かない？」

「屋上か？・・・いいね行こう」

「賛成」

「ううう 俺も賛成・・・ぐふ」

そして俺達は屋上に行ってパンを食った・・・因みに色々申し訳な  
かったからパンは俺の奢りにしておいた

## 02 授業終了 そして帰宅

・・・誠司です 昼飯を無事(?)に終わらせて5時間目も終わりました・・・俺大変な事に気が付いちゃったよ

・・・俺の家って何処だ

・・・頭の悪い子みたいに思わないでよ

だって俺忘れてたけど飛行機の機内に居たんだよ!!

んで呼び出されて気が付いたら学校だぞ!! 俺の荷物とか一体何処に行ったんだ・・・

「・・・木原君 また何か考え事かい」

・・・河野か

周りを見渡す・・・全員が立っている・・・そっぴや帰りのHMやっつてたっけ

俺はあわてて立つ

「はい ではHMを終わります 気をつけ!!礼!!」

HMが終わって周りにいるクラスメイトが帰っていく・・・サイトとシャルが俺のほうに近寄ってくる

「誠司 帰ろうぜ」「帰ろう」

「・・・わかった だが」

帰る家は何処か判らないと言おうとした だがシャルが俺の言葉を遮った

「早く行こう 場所なら判る それに待ってる人が居る」

・・・場所を知ってるのか つか待ってる人って誰?

「それは着いてからの楽しみらしいぞ　つか家を知ってんのシャルだけだし」

サイトは知らないのか　なら何とかなるよな

「おい誠司　それってどういう意味だ」

「いや　お前の場合道を間違えそうなんだが・・・って何で俺の心情を読み取れる・・・お前はもしか・・・ESP能力者か!!」

「ん？何でかって・・・んじゃ教えないでおくよ  
なんかうぜえ

「早く行く　あまり待たせられない」

そしてシャルがバツクを右手に持ち言う

「判った　んじゃいこうぜ」

「おい誠司　シャル　待つてくれ」

サイトがミカン箱・・・いや自分の席に立てかけてていたバツクを取る　俺も自分の席に立てかけてあるバツクを取って先に教室を出たシャルの後を追う　まあサイトならすぐに着いて来るだろう

教室を出てすぐのところに階段がある　俺とシャルはその階段を下りてた・・・そして唐突にシャルが俺に聞いてくる

「そういえば聞いてなかった　この服どう思う」

・・・凄く・・・似合ってて可愛いです　と言いたいのだが衆人環視の中言うのは恥ずかしい　なので俺の言いたい感想を少し下げたような感想を言った

「ん　シャルに似合ってて良いと思うぞ」

そして俯くシャル・・・この返答は駄目だったか？

「ノノ有難うノノ」

そして俯いたまま階段を下りていくシャル　少しふらついてる

大丈夫か？

そんな事を思いつつシャルの後を俺は追って階段を下りて行った

~~~~~SIDE　シャル~~~~~

私は今顔が赤くなっている 何でかと言うと説明し辛い でもセイジが言ってくれた感想の後からだからそれが原因だと思う  
私はそんな事を考えながら階段を下りていく そして  
「うわっ!!」「え?」

ドン!!

気が付いたときには私の体は前のめりに飛んでいた  
2階の階段を下りていた所で何か・・・多分生徒が私の体に残るか  
らぶつかったのだと思う  
とっさに体を上に向け後ろに手を伸ばす・・・でも私の手は空を  
切る・・・そして落ちていく私の体 そして落ちていく私の視界が  
捕らえたのは私目掛けて飛び込んでくる誠司だった

~~~~~SIDE END~~~~~

俺が階段の最後の段差を下り曲がったところで丁度シャルと男子学生がぶつかりシャルが飛ぶのが眼に入った そしてシャルの体が前のめりに落ちていく

(んな!! 間に合え!!)

俺はシャルに精一杯手を伸ばす だが届かない  
そしてシャルが体を上に向け後ろに手を伸ばすのが見えた  
このままだとシャルが落ちる そう思った俺は飛んだ そして俺の腕は空中でシャルの伸ばした手を掴み俺の前に引き寄せ抱える  
シャルの小さい体が俺の腕の中にスツと入り込む 俺はシャルを抱えやってくる衝撃に備えた

ドスツ!!!「ぐふあ!!!」

鈍い音がして背部から俺の体は着地した　そして俺の体に衝撃がや  
つて来る

・・・結構痛い・・・でも動けないってほどじゃない

俺が痛みで顔を強張らせているとシャルが心配そうな顔をして覗き  
込んでくる　目には涙が浮かんでた　俺のことを心配してくれたの  
か？

「大丈夫誠司!!無事!!」

・・・大丈夫だ　問題無い

ネタを口走ろうとしてしまった・・・

俺は無理やり体を起こす

「問題ない　シャルは無事か？」

「私は無事!でも誠司が」

「気にすんな　シャルが悪いわけじゃない　・・・アイツ顔は覚え  
たからな・・・後で叩きのめしてやる(ボソツと)」

・・・何年かは知らんが今度合ったらブチノメス!!!

そんな事を考えてるとサイトがやってきた

「・・・誠司　何でそんなところで抱き合ってたんだ?誠司とシャルが  
そういう仲つてのは知らなかったけど一応自重しろよ」

笑いながら言うんじゃないよそういうことは・・・眼が笑ってない  
から怖いんだよ!!!　つか俺とシャルはそんな関係じゃないぞ　・

・何か忘れたような・・・それも大事な事を・・・??

そして俺はシャルを放し立ち上がる　シャルが何故か不満げだった  
「んでなんであんな所で抱き合ってたんだ？」

「シャルが突き飛ばされた　んで俺が飛んで受け止めた　んで落下  
した」

「おいおい 大丈夫か？」

「大丈夫だ 問題無い」

「でも体を打った 一応医者に見てもらったほうが」

「そうそう 一応保健室に行こうぜ」

「・・・一番良い外科医を頼む」

「・・・誠司 居るのは多分保険医だぞ」

「・・・言いたかったただけだもん」

「早く行く」

シャルとサイトが俺を押し 俺はシャルとサイトに体を押されながら保健室に向かった

・・・結果として俺の体に問題はなかった

だが色々と事情聴取されてしまい時間を大幅に食ってしまったのだ  
った

02 授業終了　そして帰宅（後書き）

・・・のちに突き飛ばした奴が登場する予定

03 帰宅 そして召喚（前書き）

ダダッダダッダダッ！

やっちまったぜー！

### 03 帰宅 そして召喚

前回のあらずじ 落ちる 俺受け止める 痛かった

・・・シャルの先導で俺達は自宅っぽいところに着いた・・・走ったので息が少し上がってる。因みに学校から走って数分の所にあつた。

「・・・普通だな」

普通の家だった

「だな・・・呆けてないで入るぞサイト もうシャルは入ってる」

「ああ んじゃ行こう」

俺とサイトは家の中に入った。 中も普通という表現しか出来ない。

・・・木製の靴箱に玄関においてあるマット、そしてゴツくて大きいロッカー・・・うん、普通だな

そしてパタパタと足音がしたと思ったら奥のほうからシャルが来た。

「誠司 サイト こっち」

手招きをしながらシャルは来るように言う。

そしてリビングに出たところで俺は驚いた・・・てかなんでここに居るんだよ

「・・・なんで渚さんがここに居るんだ？」

「それについては聞かないで〜（半泣き） 色々後始末があるの・・・」

・・・何があった・・・

そんな事を思っていると渚さんが話し出す

「とりあえず怒らないで聞いてね・・・えと これで解除だったは

ず（ボソツと）」

「・・・なあ誠司 ここに居る綺麗な人は誰？」

サイトは渚さんは知らないのか？・・・まあシークレットゲームはやらせなかったしな しょうがない 紹介してやるか

「この人は綺堂渚さんっていつて俺の知り合いだよ」

「そうか」

それで満足したのかサイトは静まった

「・・・解除完了 皆 記憶戻った？」

・・・はあ 記憶戻ったって何？？

そんな事を考えてるとサイトとシャルがハツとした表情となる

・・・何があった？？

「・・・あれ？ 俺の腕が生えてる？！ んでここはどこだ 日本に帰ってきたのか！！ つか何があったんだ！！」

「誠司！！傷は無い！？それよりここは何処！？ 何が起きたの」

・・・ハア？？！！

「・・・渚さん 何をしでかしたんですか？」

「話すと長くなるんだけど・・・聞く？」

「聞きますよ シャルとサイトがどうしてこうなったか気になりま  
すしね」

「んとね まず話は誠司君と会った後に遡るの 誠司君にあった後  
サイト君とシャルロットちゃんに私は会ったの」

「・・・俺に会った後・・・か それは何時会ったときの事なんで  
すか」

「誠司君と最後に会った時の後なの 何でかって言うとな 神様が

気を利かせてくれたのよ」

あのクソ爺がだと！？ どういうことだ

~~~~~SIDE 過去 亜空間~~~~~

「……ここは？」

「気がついた？」

「なんだ！！体がねえ！！ どうなってんだ！！」

「……まだ二人は動揺してるのね……まあ殺し合いしてて気絶

気がついたら体が消えてた その上黒一面の空間にいるんだものね

「よくきいて 貴方達は私が上の物に頼まれて連れて来ました 今から言う話をよく聞いて」

「……そうか 俺は死んだんだ もしくは夢でも見てんだろうな」

「……貴方は死んでないわよ まあ他に死んだ人が二人いるけど」

「……貴方は誰……そういえば誠司は何処？」

「私は綺堂渚……職業は神の使いとでも言っておくわ

でね 死んだのって誠司君と瞳さんなのよ」

「「……え??？」」

「だから……誠司君と瞳さんは貴方達を逃がす代わりに死んだのよ」

「……どういうこと！！誠司が死んだって！！冗談はやめて！！」

「そうだ！！タチの悪い嘘をつくなよ！！そもそもあんな化け物みたいな能力をもってるあいつが死ぬわけがねえ！！」

「……友人の死を受け入れられない……か まあ死んだのを近く

で見てるわけじゃないしね

「・・・証拠のVTRが有るけど見る？」

「・・・見せる あいつは死ぬわけがねえ・・・」

「同意 早く見せて」

彼らが見たいと言ったので私は彼らに見せる・・・

「・・・どうだった 彼の死に様は？」

少し冷たかったかもしれない・・・でもこの後の話を聞いてもらいたかった この話を見ている者としては

「・・・なんで一緒に行かなかったの！！あれなら召喚できたはず！！ なん・・・で・・・なの」

「・・・ふざけんなよ誠司！！・・・なんで・・・よりもよって自爆とか・・・お前は武蔵かよ・・・」

「・・・聞いて 誠司君は死んだ これは揺ぎ無い事実よ」

「畜生！！アイツ！！何で他の機体を装備しなかった！！」

「・・・彼に許された時間もポイントももう無かった 召喚もできない状態で彼にあった選択肢は皆と心中するかあなたたちだけでも生き残らせる それしかなかったの あんな状況じゃそう選択せざるを得なかったのだと思うわ 他に選択肢があつたかもしれない でも彼は死んで残った瞳さんは残党を排除するときに反撃にあつて殺された・・・もう会う事は出来ない・・・この結果は変わらないわ・・・でも

・・・もしもつ一度誠司君と・・・もう一度一緒に過ごせるとしたら貴方達はどうする？」

「・・・あえるの また セイジと？」  
「ええ 会えるわよ でも別の世界になるけどね」  
「わかった！！ どうすればいい！！ どうすれば誠司に会える！！」  
「・・・今度はどんな世界なんだ？」  
「まあ日本って所は同じよ」  
「同じだって！！よかったあゝまた照り焼きバーガーが食える・・・  
あ・・・でも父さんと母さんが心配なんだよな・・・」  
「・・・忘れてた 母さまを治療しなくちゃ・・・でも・・・」  
「そのことなら気にしないで 貴方達はコピーだから」  
「コピー？」  
「なんだって！！・・・遂に人間をクローン化したのか・・・」  
「いや クローンじゃなくてコピー・・・まあ家族の事は心配しなくていいわよ あの世界にいるあなたたちが如何にかすると思うから」  
「・・・そうっすか」  
「コピーって何？」  
「コピーっていうのは・・・ええと簡単に言うところにいるのはあなただけあなたじゃないの そもそも連れてきたんじゃないの？あなたたちの魂を移して持ってきたって言うほうが正しいのかな どの場合は？」  
「・・・なんとなく言いたい事がわかった ようは母さまについては安心しろってことでOK？」  
「OKよシャルロットちゃん でもあなたたちには今ある能力を失って新しい能力になってもらっけどいい？」  
「大丈夫だ 問題ない！！」  
「（・・・息ぴったり） じゃあ誠司君のいる世界に転移させるね・・・頑張ってね」  
「・・・そして二人は転移した」

~~~~~さいど えんど~~~~~

「という事があったの」

「そうですか・・・あの世界のサイトとシャルは？」

この事は聞いておきたかった

「安心して 無事に脱出できたって事は判ってるから」

「その後は？」

「判らない」

「そうっすか んで何したんすか そのままあの場に転移させたわけでもあるまいし」

軽く言ってみたら渚さんが落ち込んだ・・・もしかして

「・・・そうなのよ〜間違えて送っちゃったのよ〜!!」

「うそお!!」

「嘘じゃないよ〜間違えて送っちゃったのよ〜であのままだとパニックになっちゃうから神様に頼まれて精神をいじっちゃったのよ〜

!!」

「なんだって〜!!」

「・・・それなら納得できる・・・でも精神をいじるって酷くないか??」

「もっと詳しく説明すると 平行世界で学生生活を送っているシャルロットちゃんとサイト君がいる世界から魂コピーしてきて上書きしたって言った方がいいのかな??」

なんとなく理解したよ

「・・・つまり送ったのはいいけど色々不都合があったから並行世界にいるサイトとシャルの魂を一時的に上書き んで戻ってきてもとの戻したってところか？」

「まあそう思ってくればいいと思うよ 私も詳しい方法を知ってるわけじゃないの」

・・・だったらどうやってコピーして上書きしたんだよ

「パソコンの右クリックよ」

「・・・最近のパソコンって恐ろしいな」

「・・・まあそれなら言わないで黙ってたらどう？」

「いいのかな？」

「俺が許します」

「ありがとう」

「よかつた〜これで誠司君の能力の伝え忘れとか詳しい説明し忘れたのも許されるんだ・・・よかつたあ〜」

「ライ ちよつとまって」

「・・・能力の伝え忘れってなんですか！？まだ何か忘れてたんですか！！！しまいには俺でも怒りますよ！！！」

「・・・神に対してね 渚さんみたいな可愛い人を怒れるかっての！！！」

「ドストス」「ちよつと痛いですよめてくださいマスター」

「ちょ シャル 俺の背中を殴るのやめて 地味に痛い」

「・・・ごめんね でね 能力についての補則んだけど視覚強化つてのがあつたじゃない」

「・・・そのわりには全く視力上がってないんですがね」

「そりゃそうよ だって私が伝えた後すぐに変更されたんだもん

補足をするならある特定の状況下でしか使えないらしいわ」

「ハア！！なんだそりゃ！！！」

「それで俺びを兼ねて私が派遣・・・いえ 召喚されたのよ 一応神様ともリンクしているからね えつとね 追加されたのが」

「追加されたのが・・・？」

「平行世界の誠司君が持つてる武器のコピー　あとは神様がオマケでくれた能力がいくつか・そのうちの二つの能力については神様がこの能力は癒しと復讐の力だからよく考えて使えって言えって言っただけど判る？」

「・・・まだ判断材料が少ない　他に何か言っただけで済んだか？　もう少し情報がある

「・・・あ　そうそう　両方とも血を使うから貧血に注意してって言ったた」

「・・・血を使って癒しと復讐？　なんか頭のなかに引っかかってんな・・・

まあいいや

「んで平行世界の俺が持つてる武器ってどういうことだ　まあ大体わかるんだけどさ」

「そのままだよ　平行世界の誠司君から武器をコピーしてくるの」

・・・最高だな俺！！

「でも平行世界上に存在する誠司君からかっぱらってくるからその世界に誠司君が存在して無いと意味がないのよ」

「・・・なん・・・だと！！　だとすると俺のコピーが存在するのはどの世界ですか」

「・・・聞きたい？？」

「教えてください！！」

「・・・だつたらまずステータスを開いてみて」

俺は言われるままにステータス画面を開く

「そして能力のコピーをクリックして」

こうか？

「そうするとジャンルってのが出てくるでしょ　後は好きな武器のジャンルをクリックするだけ　するとそのジャンルの武器を持つてる誠司君から武器をそっくりそのままコピーするわ　でも武器だけなのよ　防具とか道具は持って来れないわ　因みにコピーできるの

は一日に5つの武器しかもってこれないわ 弾薬は初期に付いて来るのもあれば付いてこないのもあるわ 一応入手も出来るわよ」  
えっと 今表示されてるのが

・・・はあ???

銃火器 刀剣 スーパー系武装 リアル系武装 殲滅兵器 概念武装  
弾薬

・・・えと ナニコレ

刀剣や銃火器は判るよ でもさ・・・スーパー系武装とリアル系武装って何よ・・・まさかビームライフルとか持てちゃうのか?!  
つか殲滅兵器と概念武装って・・・  
「・・・まあそうなんだけどでも誠司君が持っていないと意味がないのよ」

・・・そっか ならあの世界にいたときの奴を

結果的に入手したもの

M500 弾薬 なし

M79GL（GLはグレネードランチャーの略） 弾薬なし

AR-10 G13カスタム 弾薬なし

・・・全く使わなかった（圭）スーツ あとフレイムスロワーをセットで（圭スーツってのはデッドスペースでアイザックさんが着てたあのスーツの事です）

ウィンチイスターm1887 改造して12ゲージ弾を使用できる  
ようした 弾薬 12ゲージショットシェル80発 12ゲージ用  
スラッグ弾30発

これ入手した

「でね 強化つてのは・・・説明しづらいけど身体能力の1.5倍の強化なのよ あの世界にいたときと同じね 弾薬は災害が起きたらそこからへんに転がってると思うから でも一応少しなら持って行けるわ」

「そうつすか だったら5.56弾を300発 AR用30連マガジン5個 M500S&W弾を100発ほど あと40mmグレネード弾10個たのんます」

「判ったわ 注文しとくね AMANONで」

・・・最近のアマン ン凄いな ついに銃火器に手を出したか  
！！

「冗談よ」

さいですか

「んじやだれか召喚してみて 気になるのよ」

「・・・どうやってやれと??」

召喚の仕方なんてわからないぞ

「手をかざして召喚って言うて出てくるわ」

「そうですか なら召喚!!」

・・・・・・・・何も起きない・・・・・・・・

俺はこんな目で渚さんを見る < | >  
「あうう そんな眼で見ないで・・・・でもこれで成功するはずなん  
だけど・・・・・・・・」

・・・・召喚は期待はずれだったということだ  
ピンポン

そんな事を考えてるとチャイムが鳴る・・・・誰か来たようだ  
「はいはい 今行きまゝす」

パタパタとスリッパが地面を叩く音が鳴り響く そんな音と共に渚  
さんは玄関へ向かっていった

「・・・・・・・・!!・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・何かしら会話をしてるらしい・・・・知り合いか??

「こっちへどうぞ〜ちよっと狭いけど我慢してね」

「わかった 失礼する」

そんな声を聞いて俺は振り返った。その声をどこかで聞いたことがあるような気がしたからだ……。そして俺はこの世界に来て何度目か判らないが驚いた……。まああんまり驚いてないけど

そこにいたのは……。シユワちゃん……。か??

「どうもこんにちわ……。貴方のお名前を伺ってもよろしいですか?」

「残念だが私に固有の名前などは無い。あえて言うとなればT-800 101型だ」

……。はあ? そうですか。ターミネーターですか

「君に召喚されたから来た」

「……。どういうことですか」

「説明がいるか……。君」

「はいっ!? 俺ですか!」

T-800はサイトを指差した

「DVDプレイヤーを持っていないか? T1 2 3のディスク

がある。私が説明するよりこちらのほうが判り易い筈だ」

「渚さん。ありますか?」

「あるよ。そこ」

「すまない。では再生しよう」

800がディスクを入れる

そしてターミネーターがターミネーターを見るというシユールな光景に耐えつつ俺はターミネーターを見始めた

……。しばらくしてT1が終了した。あたりは既に暗くなってる

「そろそろ飯にしないか？」

「さんせい でも誰がやる」

「んじゃ私がやるわ こう見えても得意なのよ・・・咲美さんには負けるけど(ボソツ)」

「では私もやるうか？」

「いや 101はまっつててくれ 一応客として来てんだろ」

「わかった 主人の命令ならしょうがない」

「代わりに俺が行く 渚さん 手伝うよ」

「誠司 渚さん 頼んだぞ」

「右に同意」

そして俺は飯を作りに行ってる渚さんの援護をするために台所に向かった

SIDE リビング

「つかターミネーターって知らなかったな こんな名作に気が付かなかったなんて」

「君が知らなかったのも無理はない 何せこの作品は彼がいた世界の物だ」

「彼って誠司のこと？」

「そうだ」

「つか彼とか君じゃ分からないから名前で呼んでくれないか？因みに俺の名前は平賀才斗」

「私は・・・シャルロット・オルレアン よろしく」  
各自自己紹介を済ませた

てれれってってー

T-800の学習率が上がった

「何か聞こえたような・・・まいつか よろしく」  
「分かった よろしく頼む」

「おーい 出来たぞ!」  
「早いな!」

「ご都合主義万歳ってことで」  
「わかった これってピザか 懐かしいな」  
「ピザ? 美味しいの誠司?」  
「旨いぞ ほれ 食ってみ」  
「マヨコーンピザを切り分けシャルに差し出す  
そして食べた」

「はむはむ・・・美味しい」  
「そうか よかった んじゃ俺も食つか」  
「・・・私にもくれないか」  
「食えるのか!」

「ああ これでも神の強化は受けてある それに味覚が追加された  
ので試してみたい 私は味というものを知らないのだ いや 知っ  
ているのだがそれはあくまで情報としてだ だから知りたい 何故  
人間は旨いものを求めるのかということを」

「分かったけど・・・消化できんの?」  
「多分平気だろう 一応消化機構は備わっている・・・この世界  
で言うメイドロボのHMXシリーズに消化機構をつけてなおかつ対  
人戦闘ができるようになったものだと思ってくれればいい」

「・・・メイドロボってまさか」  
「サイト・・・いまさらかよ ここはT O H E A R T 2の世界だよ」  
「・・・異世界の次はゲームと同じ世界か・・・なんかもう驚けな  
くなってきたよ俺」



「少し待っている 今から吐き出」「ストップストップ!!」「」  
「・・・ジョークだ」

「・・・サイト 戸棚の中にカルピス（原液）があるからそれを飲んでおけ 一緒にカロリーメイトも入ってる」

「・・・そうか んじゃ頂くよ」

「そっぴい戸棚のほうに向かうサイト」

「・・・!!???!?!?! 誠司 水が出ないぞ!!」

「渚さん どうなってるん?」

「お湯なら出るわよ」

「お湯じゃ温かくなっちゃうよ!!」

「んじゃ原液で飲め!!」

「無茶言うな」

「挑戦してみたい」「シャル&101」

「お前らアホか!!」

「サイト 諦めてメイトだけ食べ」

「無茶言うな!!」

「挑戦させて（くれ）」「」

「お前らしい加減にせい!!」

「わたしは〜ふつ〜にメイトだけでもいけるよ〜」

「渚さん凄いい!!」

俺には無理だよ

「誠司〜水をくれ〜 喉がパサパサしてる〜（半泣）」

「あつたかいカルピスで我慢しろ!!」

「・・・わかった・・・」

「ねえ いまさらだけど別に原液で飲むとかお湯で飲むとかしない  
で水をお湯で溶かして薄めればよかつたんじゃないの??」



「・・・さて 何故だ おかしいぞ・・・たしかこのシーンは停止してたはずだが予備電池で再起動したはずだ」

「それは違う・・・今は予備電池を搭載しているがこの時私は水素電池のみで稼働していた それも一つでだ」

「・・・なるほど」

「で 私のCPUがダウンした そして私は停止した・・・ここから先は私が機能停止している間に私が体験した事だ

私は黒一色の世界にいた

私は不可解だった 何故だ 私は機能停止したはず

自身で考え 出た結果が不明

これしか分からなかった  
ともかく私はまだ計算し 思考が出来ているということは私は停止していない

その結論が浮かび上がってきた

そして結論が浮かび上がってくると同時に世界が変化した

そしてカメラが強烈な閃光を受けダウンした

しばらくしてカメラが回復した 世界は変化していた

そして世界は雪で覆われた・・・まさに白一面と言える世界に変化していた

変化して雪一面の世界にいるのは私 それと目の前に薄い水色の髪をした女子がいた 見た感じハイスクールの生徒あたりと同じ年頃だろう そして桜色をさらに薄くした色のロングコートを着ていた 女子はスカートを着用していたがその色は白だった 何処となく周りの景色に溶け込んで消えてしまいそうな印象を受ける少女だった

その少女が私に問いただしてくる

「ねえ貴方・・・まだやるべき事を果たしてないんじゃないの」  
少女の返答に私は答える

「ああ 確かに果たしていない だがここは何処だ・・・そもそも

私は機能停止したはずだが」

私はこの矛盾を解消したかった

「ええ 確かに貴方は機能停止したわ このままだとジョンは死ぬわ T-1000の手にかかってね・・・貴方は悔しくないの？

自分が守るはずの人を殺されるのよ」

悔しいか？ とでも言いたげに私に今ジョンが置かれている状況を教えてくる だがジョンのいる場所に行く手段がない そもそも機能停止しているはずの私に何が出来る「いや それは間違いだ 私は殺人機械だ ターミネーター そもそも生物ではない私に死ぬという言葉は当てはまらない」

「・・・もし 仮に貴方が再起動できたとしてあの場所に戻ったとしても貴方はどうするの 貴方は死ぬ気でしょ」

「私は生物ではない だから死ぬという定義には当てはまらないだが私はあの後自らを破壊する気でいた・・・私が存在しているは色々不都合があるしな」

「そう・・・なら聞いわ 貴方 召喚されてみない??」

「??? 召喚 私は裁判にでも出されるのか??」

「そつちじゃない!!! 私が言っているのは使い魔とかそう言う意味で言ってるのよ!!!」

「・・・召喚?? 使い魔??・・・なるほど これが噂の痛い子という奴なのか

「私を痛い子扱いするな!!!・・・でもこれは貴方のためを思ってる言ってるわけじゃないわ 単純な利害関係が成り立つから言ってるのよ」

「利害だと どういうことだ」

「私は貴方の力を必要としている 貴方は私の力を借りてジョンを助ける」

「・・・なるほど だが何故私の力が必要になる?」

「貴方に行ってもらいたい世界って色々危険なのよ 簡単に言うと

貴方が送られてきた未来よりひどいと思うわ あの世界にはしたくないのよ もう砂漠の中を水と食料求めて化け物どもを殺しながら走り回り拳句の果てに餓死するのは嫌なのよ・・・」

・・・何か苦労しているようだ

「わかった どうすればいい??どうすれば私は戻れる」

「いいの??」

「ああ それに奴を倒した後 私は消える気だった 私がいれば審判の日が来るだろうからな」

「よかった ならこれから貴方を送るわ 奴を倒した後色々説明するから」

「わかった そうだ 君の名を聞いていなかったな 名をなんと言う」

「私は・・・よ」

「分かった また会おう」

「ええ がんばってね」

「あ そうそう 向こうに行ったら戦友が宜しくと言ってたって言っついてね」

~~~~~

という事が会った」

「・・・何それ」

八モツたな・・・てか砂漠の中を走り回った拳句の果てに餓死して・・・3の映画版か・・・? つか戦友に宜しくって・・・??

「そっか・・・んでその後は何?」

「会わなかった 奴を倒し溶鉱炉に入って消滅した後気が付いたらこの家の玄関にいた 最優先指令がこの家のインターホンのボタンを押す事に書き換えられていた」

ちよ 最優先指令 W W W

「・・・因みに今の最優先指令は??」

ナイス質問だシャル!!

「現時点での最優先指令が書き換えられている 最優先指令が木原誠司 平賀才斗 シャルロット・オルレアン 綺堂渚 この4名の生存に書き換えられている その次に優先されている指令としてアンプレラ社の破壊 そして世界へのTおよびGウィルス蔓延を防ぐ事になっている・・・」

なるほど  
「んでさ・・・全く関係ないけどさ・・・800やターミネーターつてさ良い辛いからさ とりあえず名前考えない?」

「・・・賛成」

「賛成だよ」

「賛成だな」

「んじゃ・・・演じた男優がシユワちゃんだから・・・ジョン・メイトリックスつてのはどうだ? あいつらが生物兵器を使ってくるならこっちは第三次世界大戦を起こして対抗しようと思ってな・・・つかこれ以外案がないんだよ・・・」

「・・・命名理由が・・・」

「・・・確かに命名理由がひどいな・・・」

「いい」

「へ?」

「いいと思う」

「私も それでいいと思うよ」

「私はその名前で構わない むしろ名前を貰えるという事自体が無かったからな」

「だったらこの世界らしくT-800X - 俗称がジョン・メイトリックスで所かな?」

「わかった では私はこれよりT - 800X ジョン・メイトリックスと名乗ろう 名前を有難う父よ」

・・・父か さてその父親は何処にいるのかな？

俺は首を回し確認しようとする

「あははは そっか 確かに名前を付けたんならお父さんにならなきゃね」

ちよ 渚さん！！おれ精神年齢30過ぎで一応結婚できるけど！！明らかに子供のほうが年取ってるだろ！！

「ははは 遂に誠司も親になったか！！」

「おめでとー」

「ちよ・・・まあいいよ でもさ・・・よぶんだったら父じゃなく親父にしてくれないか？」

「断る 私はこの呼び方を気に入ってしまった いまさら帰る事は出来ないぞ父よ」

「・・・あははは となるとお母さんは誰かな？？」

・・・この場合渚さんかシャルになるな・・・選べない

「そうだな・・・誰だろうな」

選べなかったからあいまいにしておこうとした・・・のに

「父よ 私の母もはつきりさせておく必要があるのではないか？「ヤリ」

「だって誠司くん・・・どっちを選ぶのかな????????」

怖い・・・なんかその笑顔怖いよ・・・

そうだシャル！！助け！！

・・・沈黙した 無表情のシャルがいた・・・

・・・じー・・・

こっとなったら

- 1 渚さんみたいな大人の女性ですかね
- 2 シャルみたいな子の方が言いと思うぜ
- 3 俺はどっちかって言うとサイトかな
- 4 脱出・・・しかし回り込まれるだろう

・・・1か4か・・・??だが3もすてがた・・・間違えた2だよ  
2・・・俺はいたってノーマルだよ!!!!!!  
「さあ誠司・・・どっちを選ぶ!!」  
・・・俺は選択した

第五の選択肢を!!

「自由への脱出!!」  
「させるか!!」  
脱出しようとしてサイトに足首をつかまれた  
そしてつんのめって・・・  
「へぶ!!」  
頭を机の角に思い切りぶつけた

・・・

「誠司動かないぞ」

「えいえい」

「えいえい」

「二人とも何故父を突く？」

「結構面白いのだよ」

「そうか・・・」

「んじゃそろそろ解散でところでいいかな？」

「OK」「わかった」「分かった」

「部屋は勝手に使っていいからね 明日にでも部屋割りを決めよう  
ね」

「んじゃ俺はここにしますよ」

「私はここ」

「では私はここにしよう」

「私はここにするよ じゃお休み」

「お休み」「」

そして記念すべき一日目が終了した・・・

「・・・誠司 布団も掛けしないで寝て大丈夫か？」

「大丈夫だ 問題ない」

「・・・そうか」

そんなやり取りが有ったとか無かったとか



### 03 帰宅 そして召喚（後書き）

やっしまったぜ・・・でも後悔はしてない こっちのほうはフリー  
ダムに書くことにしてるから  
ちなみに元ネタはコマンドー

04 雪原 オリキャラ登場（前書き）

なんか登場しちゃったよ

## 04 雪原 オリキャラ登場

.....

何があつたんだっけ・・・

「起きろ!!!」

ドストスと腹に何か衝撃が来る・・・痛い・・・

俺は目を開ける

・・・サイト 何故俺の腹を蹴ってる

「早く起きろ!!! 遅刻するぞ!!!」

「.....」

時計を見る・・・えと・・・8時21分・・・

「ヤバイ!!!」

ちよ 何でこんな時間に!!!

「このままじゃ遅刻だ!!! 如何する!!!」

サイトが必死な顔をして俺に言ってくる・・・わかってんだよ

「早く用意して ご飯は後で」

シャルも焦っているのだろう・・・

「分かった!!! 先に行け!!! 後で合流しよう!!!」

「・・・それが出来たらやってるんだよ」

「・・・私たち・・・道が分からない」

「・・・はあ?? 昨日通つたる!!!」

そんな事を考えつつ着替える

「確かに昨日通つた・・・でも忘れた・・・」

「だめじゃん!!!」

「誠司が頼り」

「分かった 用意が出来た!!! 行くぞ」

「応!!」「わかった」

そして走り出す・・・この時点で30分だった

残りは十五分!!

道を走る 走る 走る

後の事は考えない!!今は遅刻しないように全力疾走をしている!!

「・・・もう無理」

「早いぞ!!」

「しょうがないぞサイト!!あの世界にいたときの肉体じゃないんだから・・・」

走りながら言う 説明し忘れていたが渚さんが肉体を持って世界は移動できないから同じような肉体を作ったって神が行ってたと教えてくれた 因みにスペックは全員若干落ちている

「しょうがない!!乗れ!!」

「セイジ!?!」

「時間がない!!全員まとめて遅刻になるぞ!」

「・・・まさかお前本気で走る気か!!」

「こうすれば遅刻しないですむ」

「・・・分かった」

そしてシャルを背中に背負う・・・若干顔が赤くなっているが気のせいだろう

「よし 乗ったな ではサイト・・・ついて来れるか」

「ははは・・・ temeエこそ付いてきやがれ!!」

そして・・・走り出す

「さすがに疲れるなコレは!!」

俺の脚が地面を蹴る　ただそれと同時に足が着地したところのコンクリートにヒビが入っている気がするが気のせいだろう・・・この走りつて足痛めるし色々後始末が大変なんだよな・・・勧誘的な意味で

そんな事を考えつつ走りながらサイトと軽口を言い合う

「しかし疲れるなこの走りは」

「もうへばったのかサイト」

「まさか　セイジこそ疲れたんじゃないのか？」

「んなわけなからう　シャルは平気か　振動が結構あると思うんだが」

「大丈夫　むしろもつと上がっても問題ない」

「なら加速するぞサイト!!」

「応!!」

そして・・・何とか遅刻はししないですんだんだが・・・

教室

「よう木原　お前一体あの走りは何なんだ？」

高坂が俺に聞いてくる・・・まあ当然だろうな

「ただ全力で走っただけだよ」

「しかし羨ましいな・・・なんで背中にシャルロットちゃん乗せて走っただよお前は!!」

そして高坂が俺にヘッドロックを仕掛ける　ちょ!!首に入ってる!!

「・・・!!・・・1?!431?!?!」

「弁解があるなら今のうちに聞くぞ木原ア!!」

「雄二・・・それ完全に閉まってると思うよ・・・大丈夫木原君？」

「・・・いゝぶ・・・ない」

ああ　なんか目の前が暗くなっていく・・・

「うはあ」

「・・・おゝい木原？」

「雄二・・・完全に落ちちゃってるよ木原君」

「んじゃみかん箱に寝かせてっど・・・」

「ついでに毛布を掛けておこっぜ」

「お それいいな平賀」

「サイトでいいよ 宜しくな」

「おう だったらこっちも雄二でいいぜ よろしく！」

「応!!」

「あはは・・・だったら僕も貴明でいいよ」

「ああ よろしくな」

「木原君落ちちゃったみたいだけど大丈夫かな？」

「セイジはあの程度だと死なない だから平気」

「そう・・・まあ昨日は色々あったけど宜しくねオルレアンさん」

「シャルロットでいい」

「そう ならシャルロットちゃん 宜しくね」

「こちらこそ宜しく」

「あと私も愛華でいいよ」

「宜しく 愛華」

そんなやり取りがあったとかなかったとか

~~~~~SIDE ???~~~~~

「あつつ・・・なんだ?・・・また説明会か?でもなんか違うな?・・・雪原か?」

俺はそんな事を呟きながら周囲を確認する

「久しぶりね誠司 元気してた?」

・・・少し高いが澄んだ声 そうとしか表現できない声が俺の後ろから聞こえた

俺はゆつくりと振り向く・・・今までのパターンだと俺の知っているキャラが出てきたりしていたが今回は例外だった

そこに居たのは俺の知らない女子だった 俺が知らないだけで何らかの作品に出ていたのかもしれない・・・だがそんな事はどうでもいい・・・俺はこの子を見たときに何故か心の中が悲しみに満ち溢れていた・・・

その子の髪は薄い水色の髪で腰まで届くほどの長さをしていて そして桜色をさらに薄くした色のロングコートを着ていた・・・そして下は白いスカートと白ニーソ・・・どうやらこの子がジョンを送り込んだのか・・・

その少女が顔に喜びの表情を表しつつ俺に言ってくる

「もうなによ・・・久しぶりに会えたつてのに・・・」

「・・・俺は君にあったことがあるのか? 俺の記憶の中には君のような子の姿がないんだが・・・」

そしてその子の顔が驚きの顔に変化した・・・だがすぐに笑顔になる

「そっか・・・そうだよね まず自己紹介するね 私の名前は

あいかわえいみ

哀河詠美よ 私も誠司と同じ異世界から呼び出された者みたいよ」

「そうか んで哀河「詠美でいいよ」・・・そうか で 詠美はいつたい何処から来たんだ？」

「私？私は誠司とおんなじ現実からよ 私の場合は気が付いたらこの世界にいたわ・・・色々大変だったわよ・・・でも誠司がいてくれたから何とかなつたわ」

「そうなのか・・・で聞いていいか？ その様子だと俺のことをよく知っているっぽいけど何でそんなに知っているんだ？」

「簡単よ 私は未来からやってきたんだから」

「どういうことだ」

「本来私と誠司はここでは会わないの でも神様に頼んで本来戻る時間より早く戻してもらったのよ」

「???」

全く理解できん・・・

「つまり 私は何回もループしていて私と誠司は本来ここでは会わないの 毎回世界が崩壊する直前の東京で会ってるわ 私と貴方はもつと後に会う事になってるの・・・でもそれを頼んで変えてもらって今合ってるのよ」

「・・・大理解した つまり世界が崩壊する直前で俺達は合つたのを変えてもらって今合ってるってことだな んで詠美はこの世界でループしていると」

「ええ・・・正直もう疲れたのよ・・・毎回毎回ゾンビ共が町の中を徘徊してる時に目覚めるし・・・最初なんか抵抗も出来なくて殺されたわよ・・・そんな事を10回以上繰り返してたら誠司ともう一人の戦友に会ったのよ それが前回の世界」

「そうか」

「そうよ 今回は発生する時期とかは教えてもらったわ・・・毎回東京で発生してたのが何で北海道なのよまったく・・・ブツブツ」

「そうか・・・大変だったんだな」

「ホント大変だったわ・・・ガサゴソガサゴソ」

「何をしてるんだ？」

「誠司に渡しておきたいものがあるのよ 前回の誠司と2人の戦友が残した形見をね」

「そうか・・・??？」

「??何だコレは??？」

「防弾対爆使用のコートよ・・・所々破れた跡があるけどそこは私が繕っておいたわ 誠司が最後に来てた奴なのよ・・・あとこれ SPAS12とドラグノフ SPASとドラグノフは改造しないで使ってあげて 一応戦友の形見だから」

SPASはメタルストックが付いていた そのほかに改造されてはいない ドラグノフは銃剣が付いていてスコープには夜でも照準可能なようにクロスヘアが発光するように改造されてあった・・・つてこのカスタムどこかで・・・まさか

「・・・なあ このドラグノフ持ってた奴ってもしかして大きい狼と一緒に小柄な子だった??？」

「分かつちやたのか・・・つまんないな」

「・・・もしかしてその子の名前って」

「レキよ・・・ホント初めて合った時は私も驚いたわよ 何で緋弾のアリアの登場人物がここにいるんだってね でもいい子だったよ・・・」

「何でこんなとこに来ちゃってんの!!！」

「誠司が元凶じゃない!!！」

「はあ!??」

何故俺が元凶!??

「誠司の召喚よ!!！」

「・・・すいません」

納得した・・・って前回も能力持ちだったんか俺

「・・・でもあの時はしよすがなかったと思うわ・・・」

「何があつたんだ・・・」

「聞かないでくれると嬉しいわ あれは私の失態だったの・・・」  
「わかった・・・聞かないでよくよ」

誰にでも聴かれたくないことがあるもんだしね

「ありがと・・・そうそう 前回のときは3人までしか召喚できなかったけど今回は何人だったの？」

・・・教えてもらってない 内緒って言われて聞いてない・・・

「はあ・・・その様子だと知らないのね」

「面目ない・・・」

「いいわよ前日も同じだったし・・・んじゃ他の能力はどう？」

「ええと・・・平行世界に存在する俺が入手した武器のコピーを手に入れられるのと能力不明のがいくつか・・・」

「平行世界の誠司が持つてる武器の入手・・・今はどんなのがあるの？」

「ちよつと待つててくれ詠美 今表示する」

そして表示する・・・詠美が覗き込む・・・

「ぶっ！！何よこれ！！あははははスーパードリル系とリアル系ってあははは！！しかも殲滅兵器って何よははは概念武装www・・・げほ！！ あはは息が出来ない・・・」

見て笑い転げている詠美

お気に召した用で何よりです姫 ですが転がらないほうがいいと思います 色々見えてはいけないものが見えてしまいそうです てか見えてます もう手遅れです

そんな事を考えていると顔を真っ赤にして息切れしている詠美がこちらを睨んでいた

「・・・みた？」

・・・うん俺は何も見ていない 青いストライプなんて見ていない

「何も見ていないぞ」

「そう・・・ねえ誠司・・・」

声のトーンを落として詠美が聞いてくる・・・怖いです

「しましま」

「ストライプはいいものです・・・しまったあ!!!!!!」  
つい反応してしまった!!!

「一回吹っ飛ばえ!!!」

そして詠美の足が俺の顔目掛け飛んでくる・・・あ また見えた

「ガガリイイインンン!!!」

そして俺は奇妙な叫び声を上げて意識が落ちた

「まったく・・・天誅よ天誅!!!!・・・またね誠司 次会うときは  
・でね」

~~~~~SIDE OUT~~~~~

お・・・俺はいつたい???・・・???・・・

「・・・起きた？ セイジ！！」

ええと現状を確認しよう

蹴られた 気が付いたら学校のベットで寝ていた そして看病していたのか横にシヤルがいる

「ええと・・・何があつたんだ？」

「まだ混乱している？ 貴方は高坂に首を絞められて気絶していた 大丈夫？」

「何とか平気だ 今は何時だ？」

「3:36 もう授業は終わってる サイトはそろそろ来る」

「そうか ありがとな」

「気にしないで やりたかったからやっただけ」

「それでもだよ 礼は言うべきだろう」

「そう なら受け取っておく」

「よし じゃバツクをとりに行くか」

「わかった」

「失礼しまゝす おう誠司 めえさめたか」

「ああ なんとかな」

「雄二がやり過ぎた スマソだつてよ」

「・・・わかった 今度シバいておくよ」

「そうか あとこれバツク取って来ておいたぜ」

「サンキユ 助かった」

「気にすんな じゃ行こうぜ」

「ああ」「こくん」

そして帰路につく俺らだった・・・



## 05 更に召喚!!

前回のあらすじ 遅刻 絞め落とされた 夢の世界へLet's  
Go!!

「なに呆けてんのよ誠司」

「何でそんなにくつろいでるんだよ詠美」

「んもう いいじゃないそんなこと・・・つか誠司の周りって色々カオスだね・・・私も色々ゲームやってたからわかるけど・・・正直このカオス差がなんか恐ろしいんだけど」

「そこまでカオスなのか父よ」

ジヨンの父というワードに反応して詠美の顔が驚きに染まる・・・そして笑顔でこちらに迫ってくる

「父!?!?! 誠司・・・母親は誰なのかしら・・・???!」

「ちょ・・・詠美さん怖いです!!! 声のトーンを落とさないでください!!!」

「それで誰なのかしらあ?? 早く答えてくれないと実力行使になっちゃうわよお・・・」

「母はいない」

「え??」

「私に母はいないと言ったのだ」

そして静かになる詠美

「ちよつと調子に乗ってたわ・・・ごめん」

「気にすんな 一応入っておくが実子ではないぞ 例えるなら名付け親だ」

「そうよね・・・よし まだチャンスはある!!!」

詠美が何か呟いている

「何のチャンスだ？」

「はうつつ！！気にしないで 独り言だから！！」  
凄いい剣幕で言ってきたので若干驚いた

「そ・そうか・・・」

「んでどうするの 今召喚やつちゃうの？」

「・・・正直迷ってる 召喚して戦力を増やすか危機的状況に陥った時のために温存しておくか・・・」

「そうか・・・どうするんだ誠司」

「同意 どうするか決める」

「私は温存しておくほうがいいと思うわ 何が起こるかわからないもの・・・でも今のうちに召喚しておいて仲良くなりたいたいし・・・迷うよ」

「私は父の考えたことに従う」

「・・・どうするか・・・」

その前に現実逃避してなぜ詠美がここに居るか説明しておこう  
家についてくつろいでたらチャイムが鳴ってドアを開けたら雪原に  
いたときの格好のままの詠美がいた・・・いや なんか色々バッグ  
が大量に持ってた

「誠司 来ちゃった てへ」

・・・ボタン

無言でドアを閉めた

「ちょ！！ひどくない誠司！！」

「俺は何も見えていない俺は何も見えていない！！」

「どうした父よ」

「ジョンか！！気にするな！！ただの押し売りだから！！」

「押し売りってひどい！！」

「押し売りか・・・ならこいつで驚かしてやるうか」

そして玄関に立てたガンロッカーからウィンチェスターを・・・つておい！！

「ちょー！！ウィンチェスター出すな！！　そして弾込めんな！！」  
ヤバイ　このままだと銃刀法違反で大変な事に！！ばれたらタイーホされる！！

「わかった　ではこいつで」

「フレイムスロワー持ち出すな！！」

「・・・駄目か・・・」

「ううゝあゝけゝろゝ」

「・・・分かった」

「押し売りではないのか？」

「違ってみただな」

「そうか　では私は戻る」

「ああ」

そしてジョンが戻る　そしてドアを開ける

「・・・ひどいね・・・誠司・・・」

「何故ここにいる」

俺は聞いてみる事にした

「いやさ・・・私あの学校に転入することにしたから」

「はあ?!」

「だから私もあの学校に転入することになったのよ!!」

「・・・とりあえず入れ　聞きたいことがある」

俺は渋りながらもこいつを入れることにした・・・

「んじゃお邪魔しまゝす」

・・・そして今に至る

「誠司 現実逃避してないで早く決断しちゃってよ」

「・・・だったら・・・召喚するか」

「何故？」

「災害が発生してからどうなるか分からない・・・そうなるかどうか言ってられないからな 戦力は多くあつたほうが良い だから召喚する」

「・・・納得 でも召喚してもその人が戦力にならない場合があるんじゃないの？」

詠美が俺に聞いて来るが渚さんが代わりに答えてくれた

「その点については問題ないよ 基本的に戦闘できる人が選ばれるから」

「そうか」

「んじゃ誰が来るかな・・・召喚!!」

「・・・何も起きないな」

「また外か??」

そうかな??

「また???どういうこと誠司??」

「詠美は知らないか・・・ジヨンは召喚されたときに外に居たんだよ」

「そつか 場所指定すればよかったね」

「気にしないでくれ 私はむしろ君に感謝している 君のおかげで父に会えそして名を貰えた それに味覚も追加されたしな」

「そつか」

ピンポン

また外か・・・

「また外か・・・よし父よ 私に行かせてくれ」

「んじゃ行つてこいジョン」

「承った」

そして玄関へとジョンが行く・・・

「そういえばなんでシュワちゃんがジョンなの？」

「ああ ジョンはターミネーターなんだが名前がないと呼び辛いから名前をつけたんだよ そしたら名付け親になっちまった 因みにフルネームでジョン・メイトリックスで一応この世界だとメイドロボ？扱いだから形式番号がT-800Xってついてある」

「そう・・・コマンドー？」

「コマンドー」

「そっか・・・」

「戻ったぞ」

「おう お帰り」

ジョンが戻ってきた・・・??

「敬礼!!」

ピシッ!!と擬音を付けたくなるような敬礼をした

俺はつい立ち上がり敬礼を返す・・・てかこの人・・・なんで・・・??

「ええと・・・失礼ですが貴方のお名前は」

「はっ!!国連軍横浜基地所属!神宮寺まりも軍曹であります!!」  
・・・は???

「ええと・・・とりあえず楽にして・・・とりあえず座ってください  
い」

「はっ!分かりました!」

もうなれたよ でもさこんな意外な展開があるとは思わなかったよ

「父よ 茶を組んでくる」

「いえお構いなく・・・つて父!？」

神宮司さんが動揺してる・・・そりゃそうだろう・・・なんせ見た目若いのが父つて呼ばれてるしその上呼んでるのがおっちゃんだからな・・・

「失礼しました あのこと…少し動揺してしまつて」  
申し訳なさそうに神宮司さんが謝る

「いえ よく言われることです お気になさらず あと敬語を使わなくてもいいですよ」

「分かりました…ええと」

「木原誠司です…ではお聞きしますが貴方はここに来る前に何処に居ましたか？」

「これは重要な事である なんせAかUかそれともEXか…いや…EXはないか とにかくこれだけは聞いておきたい…」

「はい 私は崩壊した演習場で白金少尉と一緒に居ました…白金少尉が撃墜されて落ち込んでいたので慰めていました…白金少尉が立ち直つて…後ろで物音がしたので私振り向きまして…そこに居たのは兵士級でした…私が…」

「…誠司トラウマ発生中…」  
「…私が最後に見たのは兵士級の口でした…」

震えながら言う…

「もういいです すいません」

正直トラウマである あのCGはトラウマだ ……という事はAのまりもちゃんか…

「ではこちらから質問してもよろしいですか？」

「…あんなトラウマを抉り出すような事聞いたんだつたら返答しなきゃな」

「なんですか」

「はい あなたが私を召喚したのですか？」

「ええ そうです」

「有難うございます 貴方のおかげで別の世界ですがもう一度生きることが出来ます…本当に有難うございます」

ちよ 頭下げないで!!

「いいえ 礼を言わないでください…ある意味貴方をあの世界以上に悲惨な世界に呼んでしまったのですから」

「・・・それでもです 私が・・・いえ世界中が夢見たB A T Eが居ない世界・・・それを見ただけでも私は幸せです・・・」

「そうですね・・・」

「父よ 茶を汲んで来たぞ」

「ああ有難う」

「お構いなく」

「で 貴方はどうしたいですか？ この世界で何がしたいですか？」

「私は・・・出来る事ならこの平和な世界で教師をやりたいです」

そついや神宮寺さんの夢って教員だったな

「そうですね・・・もしかしたら何とかなるかもしれないよ」

「本当ですか！！」

「ええ ですが大変な道になるかもしれないよ」

「やってみます！！」

「なら全てが終わった後教師を目指してみるのもいいかもしれないね」

「ええ 頑張ります・・・??全て??もしかしてこれから何かをするのでしょうか??」

「もしかして何も知らされていませんか？」

「ええ」

そして説明した・・・この跡何が起こるかを

「そんなことが・・・」

「ええ そして俺達の目的はアンブレラの破壊を最終目標にしています その目的を達成するために貴方の力を貸してもらえませんか？」

「ええ そんな非人道的な兵器の開発など許されることじゃないです！私の力でよければ手伝わせてください！！」

「有難うございます では今後俺の名前は誠司でいいですよ」

「はい 私のご事は神宮寺でもまりもでいいです」

「ではまりもちゃんと」

「・・・そう言う風に言われるのは二度目です」

「白金ですか最初は？」

「何故知っているのですか？」

ああ・・・説明してなかったな

「ええ 俺は白金たちが体験した事を間接的に知っています・・・それに白金が何者なのか・・・彼の特別の本当の意味を・・・」

「・・・白金の特別の意味はあの起動のことではないんですか？」  
まあそれもあるけどね・・・

「それを説明する前に敬語を止めてください・・・年上の人に敬語を使われるのは苦手なんで」

「そう わかったわ で白金の特別の本当の意味ってなんなの？」  
やっと普通の口調になってくれたよ 正直年上の人に敬語を使われるってのが苦手だね

「それは貴方の目で見て確認してください」

「そっかい俺は驚くことにこの世界で発売していた小説版マブラヴ全7巻を神宮寺さんに差し出す・・・俺にはまりもちゃんとは呼べないよ・・・なんか恥ずかしいんだよ!!」

「これは・・・？御剣達??」

「これを読めば全てわかる!!」(ちよつと修造風に)

「そう 分かったわ」

「んじゃ紹介しますよ 俺の仲間・・・いや 家族を」

そして皆を紹介していった・・・いちおう応接するのは俺の仕事にして皆には自室で待機してもらっていた

ただ神宮司さんのジョーンを見る眼がちよつとおかしかったような気がするが気のせいだろう

「そっかいや誠司って能力もちなんだよね」

リビングで寛いでる俺に唐突に詠美が聞いてくる

「ああ ええとたしか」

「知ってるわよ 強化系が2つと召喚 平行世界に居る誠司の武装のコピー あと詳細不明がいくつか・・・でしょ」  
よく覚えてたな

「んでさ・・・私の能力も教えておこうと思ってさ」  
お前も能力持ちかよ・・・

「そうか・・・んでどんなのなんだ？」

「えっとTウイルスに感染しないようになって筋力の1・25倍  
化 あとは他の人の能力の回覧よ」  
・・・なんか微妙だな

「なんとというか・・・地味ですな」

「しかたないじゃない！つか誠司の能力が馬鹿みたいにおかしいのよ」

「馬鹿って言われた〜うわ〜ん」

「・・・殴って良い??？」

「ごめんなさい」

「わかればよろしい あとサイトとかって能力持ちなの？」

「知らん・・・つか気付いてないんじゃないか・・・サイト馬鹿だから」

「あゝあ 確かに・・・覗いてみる」

「・・・許可する やっておしまい!!」

「あらほらさっさ〜・・・粉砕してくれようか？（息子的な意味で）」

「ごめんなさい」

「・・・ついでに皆を呼んで調べてみる？なんか新たな発見とかあるかもしれないわ」

「・・・呼ぶか」

そして皆をリビングに呼び寄せる

「なんなんですか〜」

「それはこれから説明します 皆が能力持ちかどうか調べるんです

よ

「……??? どういうことだ?」

「つまり潜在的に能力を持つてるかどうか調べるから皆を呼んだって所よ……まずサイト来て」

「ん……ああ わかった」

そして詠美に呼ばれてサイトが詠美の前に来る

「えっと 表示」

そしてステータス?っぽいのが表示される……

「どうだ」

どうやら正面からじゃないと見えないっぽい

「えっと……なにこれ」

『擬似ガンダールヴ』（効果 武装情報の把握 筋力強化1.5倍）

『クリティカル率5%』（クリティカル率の増加）

『T抗体所持者』（通常の方法ではTに感染しない ただし体内に直接高濃度のTを流し込まれた場合は別）

「???」 誠司の脱出条件を満たしたとき解放 詳細不明

「……なんというか……まあいいんじゃないの?」

「何だっただんだ?」

とりあえず教えてやるか

俺はサイトに能力を教える なんとというか新しい能力じゃなくて残念そうな顔してた……

「まあ次 シヤルな」

俺が呼ぶとシヤルが詠美の前に来た

「んと???読めない」

「ん? どうした?」

「……この文字が読めないのよ……どうしてかな?」

どれ ちよつと見てみよう

俺は文字を見ようと詠美が表示したステータス表らしき物に近づいた……ってこの文字どこかで見たような気がする……何処だっけ???

「父よ 私が見てみよう 私の頭にはあらゆる国の言語が搭載されているぞ」

「だったら頼むか」

「んじゃ頼むよ」

「承った では見てみよう・・・む・・・コレは・・・？」

「どうした」

「ジヨンの様子がおかしい??何があった??」

「父よ この文字について分かった・・・」

「どうしたのジヨン?・・・誠司 アンタなんかやらかしたんじゃないでしょうね」

「いえいえ違いますよ詠美さん んで何が分かったんだジヨン」

「・・・この文字は地球の物ではない・・・わざわざ読めない文字で表示するとは・・・どういうことだ」

「ジヨン思案中・・・しばらくして再起動」

「シャルロット この字を読んで見てくれ もしかしたらコレは・・・」

「ジヨンが渋い顔をしながらシャルにこちらに来てこの字っぽいのを読んでくれと言う そしてシャルがこちらに来た」

「・・・???ハルケギニア語?何で・・・? とりあえず読む」

結果

『T抗体所持者』

『FPS能力者』(銃火器を持った時に発動 自身の発射する銃弾の着弾点にクロスヘアが表示される オプションでクロスヘアを使わなくすることも出来る)

『ハープ調査』(ハープを調査できる)

「??」誠司の脱出条件を満たしたときに解放 詳細不明

・・・なんというか・・・状況しだいでは役に立ちそうな希ガス

つかこのステータスってもしかして個人個人で表示できるんじゃないかね

えのか？

そう思い俺はジョンに聞く

「なあ ステータスを表示するって念じてみてくれないか？」

「・・・やってみよう」

そしてすぐさまジョンの目の前にステータスが表示される どうやらビンゴだな

だったらと思い皆でステータスを表示する・・・なぜか渚さんはステータスを表示する代わりにJのPDAが出てきたが・・・つか渚さんのPDAになんか説明が全部入ってたんだけど・・・

そして全員で渚さんのPDAを覗き込んだ

各自能力

サイト

『擬似ガンダールヴ』（効果 武装情報の把握 筋力強化1・5倍

ただしガンダールヴの能力の劣化コピーなので性能は本家に劣る）

『クリティカル率5%』（クリティカル率の増加）

『T抗体所持者』（通常の方法ではTに感染しない ただし体内に直接高濃度のTを流し込まれた場合は別）

「????」

シャル

『T抗体所持者』

『FPS能力者』（銃火器を持った時に発動 自身の発射する銃弾の着弾点にクロスヘアが表示される オプションでクロスヘアを使わなくすることも出来る）

『ハープ調合』（ハープを調合できる）

「????」

ジョン

- 『味覚』(そのまま 味が分かるようになる)
- 『学習力向上』(多少学習率が上がる)
- 『近接戦闘強化』(これでもうハンターには倒せないぜ!!)
- 「自爆」自身のパワーセルを意図的に暴走 ビル一個分の破壊力を持つ水素爆発を発生させる 使用した場合死亡する
- 渚さん
- 『ツール ドアコントローラー』(電子制御化にあるドアを開閉することが出来る なおロックされていた場合無理やり開かせる この能力は自身の意思で使用可能)
- 『ツール Tサーチャー』(このPDAから半径20MにT感染生物が進入した場合 設定した音楽が鳴る 音楽は設定することが可能)
- 『ツール ネットワークフォン』(このPDA以外のPDA所持者に連絡を取る事ができる 送受信可能)
- 『T抗体所持者』
- まりもちゃん
- 『87式突撃砲』(P90装備時 外見が87式突撃砲に変化する なお25mmグレネード弾を発射可能)
- 『網膜投射システム』(自身が敵と認識する物にロックオンできる 視界内のみ有効 なおFPS能力が使用可能になる)
- 『T抗体所持者』
- 詠美
- 『T抗体所持者』
- 『回覧 能力』(能力持ちの人の能力を詳細含め回覧することが可能)
- 『筋力強化1・25』(自身の筋力が1・25倍になる)
- 誠司
- 『作成、改造』物造りのスキル、現代科学で出来る事ならそこらへんにある道具で作れるスキル
- 『筋力強化1・5』

『平行世界に居る自身の武装のコピー』（説明ダライ 1日5個  
弾薬は武装としてカウント 災害発生後は使用不可 ただし脱出条  
件を満たした場合使用可になる 脱出条件はT-002 003の  
破壊）

『・・・』（詳細不明 緊急時のみ使用可 血液を使用）

『・・・』（詳細不明 緊急時のみ使用可 血液を使用）

『・・・』（神に隠蔽されている能力 詳細回覧付加）

『T抗体所持者』

『神の制約』（神より得た力の代償 脱出条件を満たさなければ死  
亡する）

なお誠司の武装のコピー能力のみ災害発生時から一定期間使用不可  
期間については前項にて記載

・・・凄いな（主に渚さんとまりもちゃんの意味で）  
つかFPS能力ほしいな・・・  
そんな事を考えていた俺だった

そしてその後・・・詠美に呼び出されて今詠美の部屋に居る・・・  
因みにこの家の住人が二人増えた・・・もちろん詠美と神宮寺さん  
である

「そつだ誠司 これ忘れてたけどはい」

「コレは・・・」

「あの時渡し忘れてた銃火器とコートよ 大事にしてね」

「それはいいが詠美の分はあるのか？」

俺に渡して丸腰になるのは避けたい

「大丈夫 他にもあるから その銃は誠司と仲がよかったメンバー

のなの・・・だから渡したの・・・そのドラゲノフはレキの  
そしてSPASは私のよ」

・・・スパスは詠美のだったのか

「レキのほうがいいが詠美のは貰っていいのか？」

「気にしないで もともと誠司からもらった奴だから 私は返した  
だけ」

「そうか だったらまた貸そうか？」

「・・・いいの？」

「ああもってけ それにSPASは好きだが扱いづらくてな・・・  
正直ウインチェスターのほうが使いやすいんだ」

正直あのレバーアクションには憧れてる

「そっか そうだ あの時よく見れなかったんだけどもう一回あの  
画面見せてもらえない？」

「ああ いいぞ」

そして表示 詠美が画面を見ながら話しかけてくる

「武器でさ VP70ってのがあったじゃない あれって入手でき  
ない??」

・・・VPか あれなら既に持つてるな

「ああ つかすでに入手してあるぞ」

「・・・それもらえないかな・・・あれ結構使えるのよ」

「いいぞ もってけ」

「ごめんね」

「気にすんなや・・・そうだ 入手しとかないと」

ええと Mk-23とそのオプシオン

AK-47にGP-15

モーゼル9mmに

ガバメント

M93R

を入手 俺の部屋に置いてあるロッカーに保存しておいた

「・・・んで誠司」

「なんだ？」

唐突に詠美が話しかけてくる

「・・・死なないでね」

「・・・俺に死亡フラグを立てさせる気が」

そんなに俺を死なせたいのかこいつは

「違うわよ馬鹿・・・もう私たちを置いて勝手に死なないでって言つてんのよ・・・」

「そうか・・・大丈夫だ　俺が死ぬのはアンブレラを倒した後だ・・・約束する」

正直死ぬ気はない　もうあいつらを置いて死ぬのは御免だからな

「・・・絶対に死なないでね」

「ああ」

そんなやり取りがあったとかなかったとか　なお後日完読して号泣しているまりもちゃんをジョンが慰めていたのはシャルしか知らないことだった

そして学校についた俺らはまたも驚いたのだった

「転校してきた哀河詠美です！！宜しくね！！」

「ううう　おお　おお　おお　おお　！！！！」

「何故だあああああ！！！！俺の平穩を返してくれええええええええええええええ！！！！！！！！！！」

そんな声が学校中に響きわたった・・・そして先生に怒られた俺らだった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8418s/>

---

B I O H A Z A R D ゾンビと誠司と時々学園生活www

2011年10月8日22時14分発行